

2024年度館長講座  
—遊佐町の考古学Ⅰ—

第2回講座

遊佐町の縄文時代中期から晩期

当館館長

渋谷 孝雄

令和6年7月14日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

# 『遊佐町の考古学』

## 第2回 遊佐町の縄文時代中期から晩期

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

館長 渋谷 孝雄

### 2 発掘・試掘等現地調査が行われた縄文時代の遺跡

#### (4) 中期の小山崎遺跡

##### 縄文時代中期の調査成果

##### 1) 中期初頭から後葉前半の土器

小山崎遺跡では2次調査の半島状台地の東、牛渡川の西の3次調査E区で中期初頭の北陸系の新保式併行の土器がまとまって出土した。また、1次調査のT2VI層、2次調査のA区VIII層、4次調査一区のVIII層上部の舌状台地の西も低地東部でも出土している。

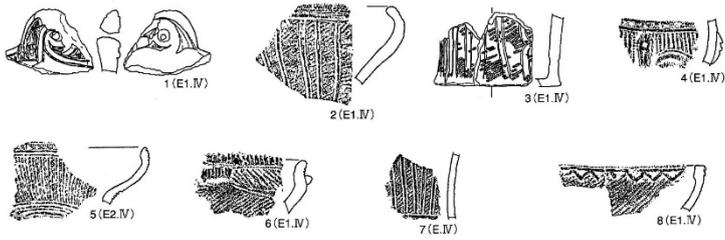
時期区分	土器型式 (併行関係)	土器 分類	出土地の性格と主要な土器
前期 中期	末葉 初頭	新保・新崎式 (北陸搬入)	遺物集中出土範囲
			
			包含層
			

図1 小山崎遺跡の中期初頭新保式の土器

中期前葉の大木7a式、7b式の土器は小山崎遺跡では出土していない。

時期区分	土器型式 (併行関係)	土器 分類	出土地の性格と主要な土器
中期 中葉	大木8a式 ~8b式 (東北在地) 馬高式 (北陸搬入)	12 13 群	遺物集中出土範囲
			
			

図2 小山崎遺跡の中期中葉大木8a、8b式土器

中期中葉に入ると低地東部の4次調査一区のVI層や5次調査P区で大木8a式の土器が出土し、同じく低地東部の1次調査T1、T2のVII層、T3東深堀区のVI層、2次調査A区のVIII層、6次調査のR区IVa層で大木8b式の土器片が出土しており、R区では馬高式の土器片も出土している。

低地東部や台地直下の廃棄場、水辺遺構の構築前の自然層から中期後葉大木9式の土器片が出土している。

時期区分	土器型式 (併行関係)	土器 分類	出土地の性格と主要な土器
中期	後葉	大木9式	14群
			<p>廃棄場(浅い沢の台地寄り)に形成</p>
			<p>浅い沢中央部</p> <p>水辺遺構下層の自然堆積層</p>

図3 小山崎遺跡の中期後葉前半大木9式土器

## 2) 中期後葉～末葉の住居遺構

14次調査で、半島状台地の北部の急斜面に住居があることが確認された。ここは、平均斜度17.5度の斜面地で、南面し、日当たりも良好であり、現在は杉木立に視界が遮蔽されているが、本来は、庄内平野や月山を望める場所である。

14次調査から16次調査まで中期末葉大木10式期の住居跡が7棟検出された。うち3棟には複式炉があった。

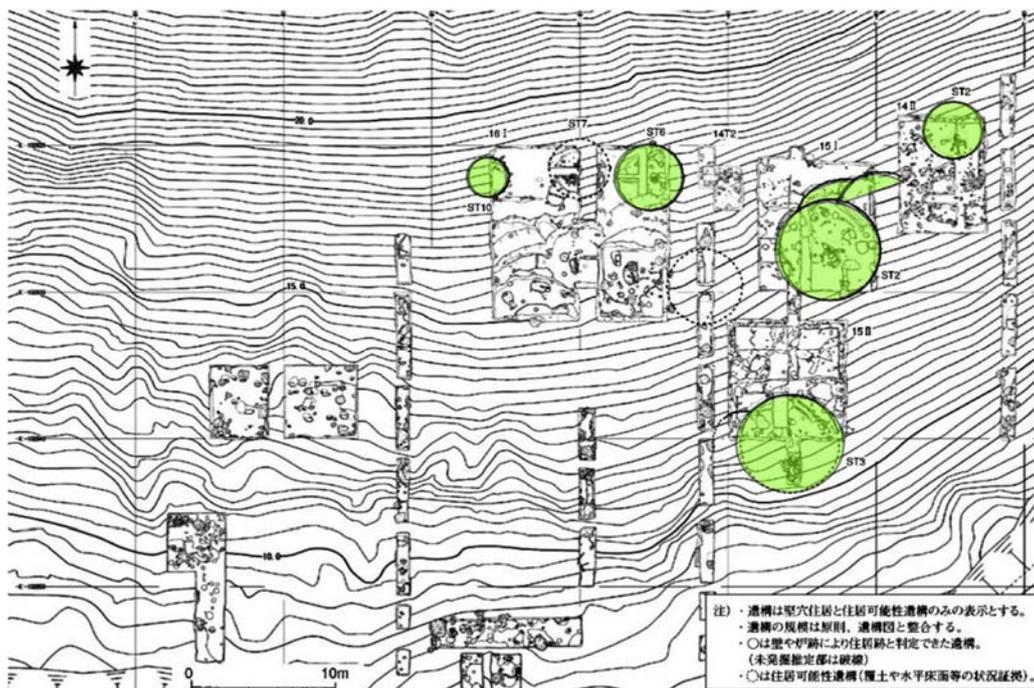


図4 中期後葉から末葉の竪穴建物跡(住居)の位置

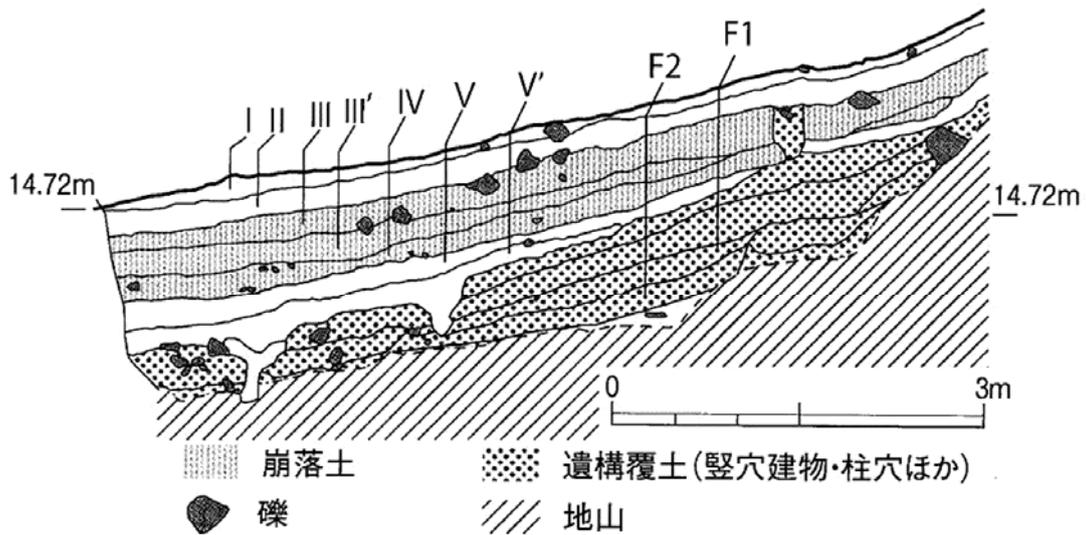


図5 斜面部の竪穴建物の十層断面図

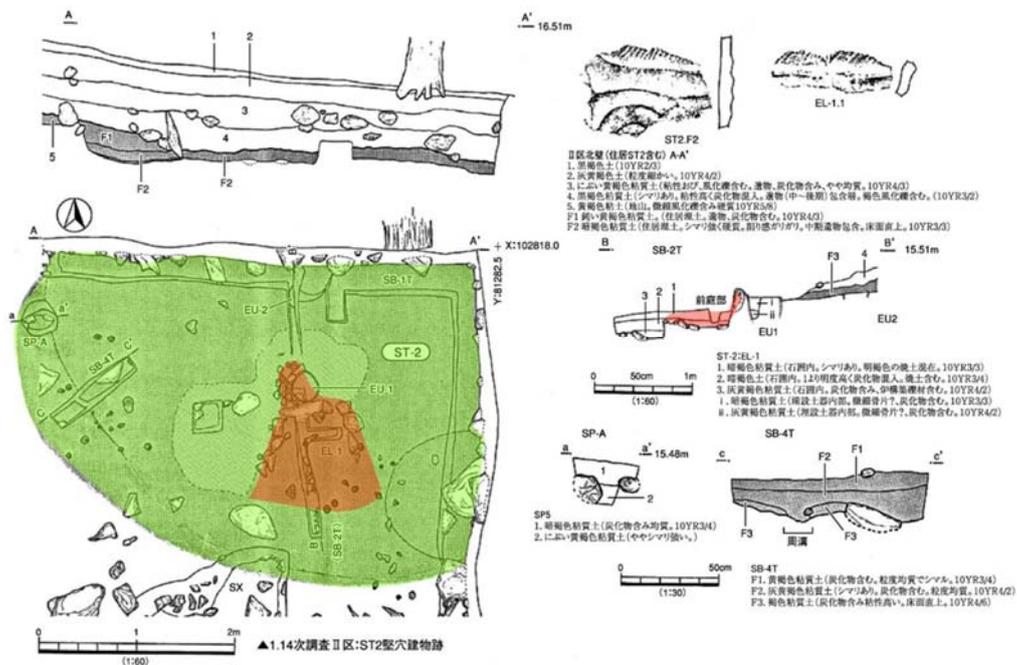


図6 14次調査Ⅱ区ST2平面・断面図、出土土器拓本

### 14次調査Ⅱ区ST2住居跡の概要

平面形は円形で東西4.6×(3.0)mの規模を測る。床面標高は15.11mで壁の立上りは西壁で約50cmを測る。床面は水平で叩き締められている。柱穴は1基、床面で土坑1基を検出。床面中央で埋設土器1個体を確認。炉は前庭部、石組部、土器埋設部からなる複式炉で石組で採取した炭化物の14C年代は4,000±40yrBPであった。

### 15次調査Ⅰ区ST2住居跡の概要

平面形は円形で(5.5)×(5.0)mの規模を持つ。床面標高は13.7mで壁の立上りは北壁で約120cmを測る。主軸方向:N-25°-Wを測り、柱穴とみられるピットは8期確認したが、そのうちの4基が主柱穴と考えられる。壁際に周溝があり、半円状に残存する。当住居に先行する周溝が2条検出された。床面には針床が確認された。

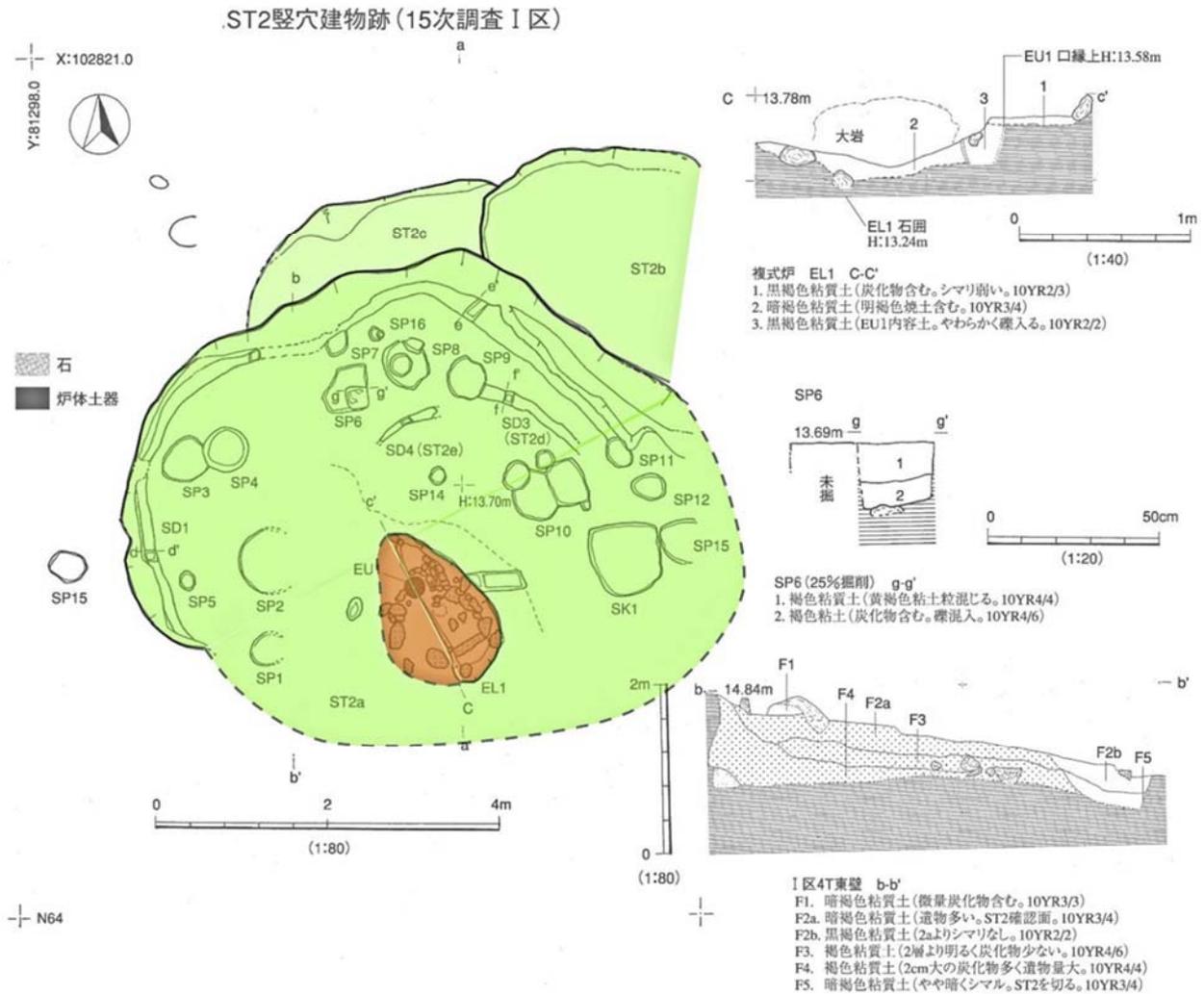


図7 15次調査 I 区 ST2 平面・断面図

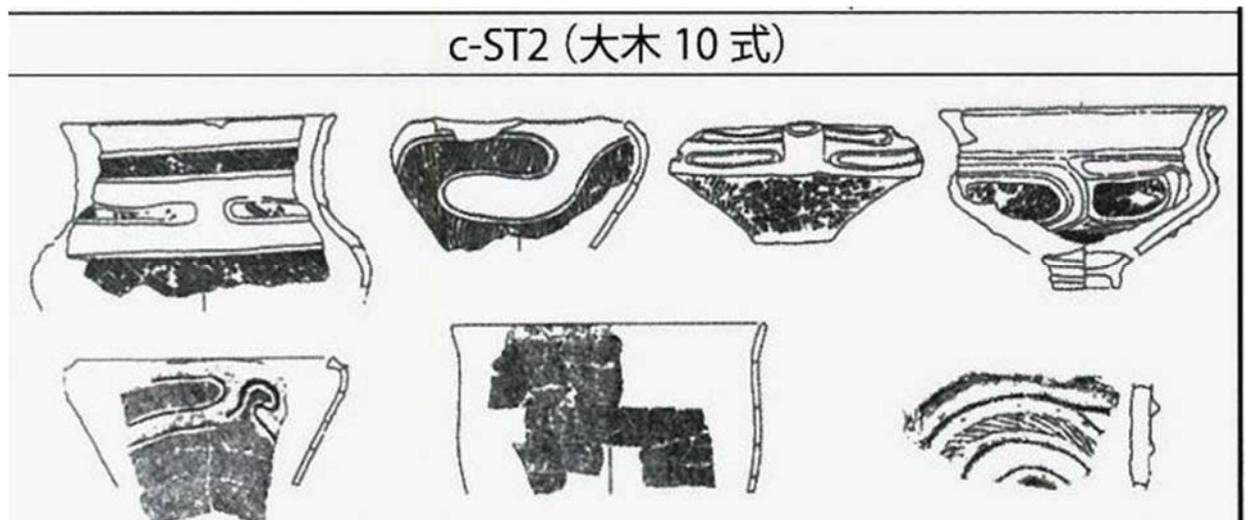


図8 15次調査 I 区 ST2 出土土器

### 16次調査 I 区 S T 6 住居跡の概要

平面形は円形で半円状に残存する。住居の規模は東西上端 (3.4m) で推定直径は約4mとみることができる。壁の立上がりは北壁で約35cmを測る。

主軸方向はN-7° -Wで、床面で柱穴を4基検出した。北東部でわずかに残る周溝を検出。床面標高は16.74mで貼床が認められる。前庭部を欠失し石組部と土器埋設部からなる複式炉が確認された。

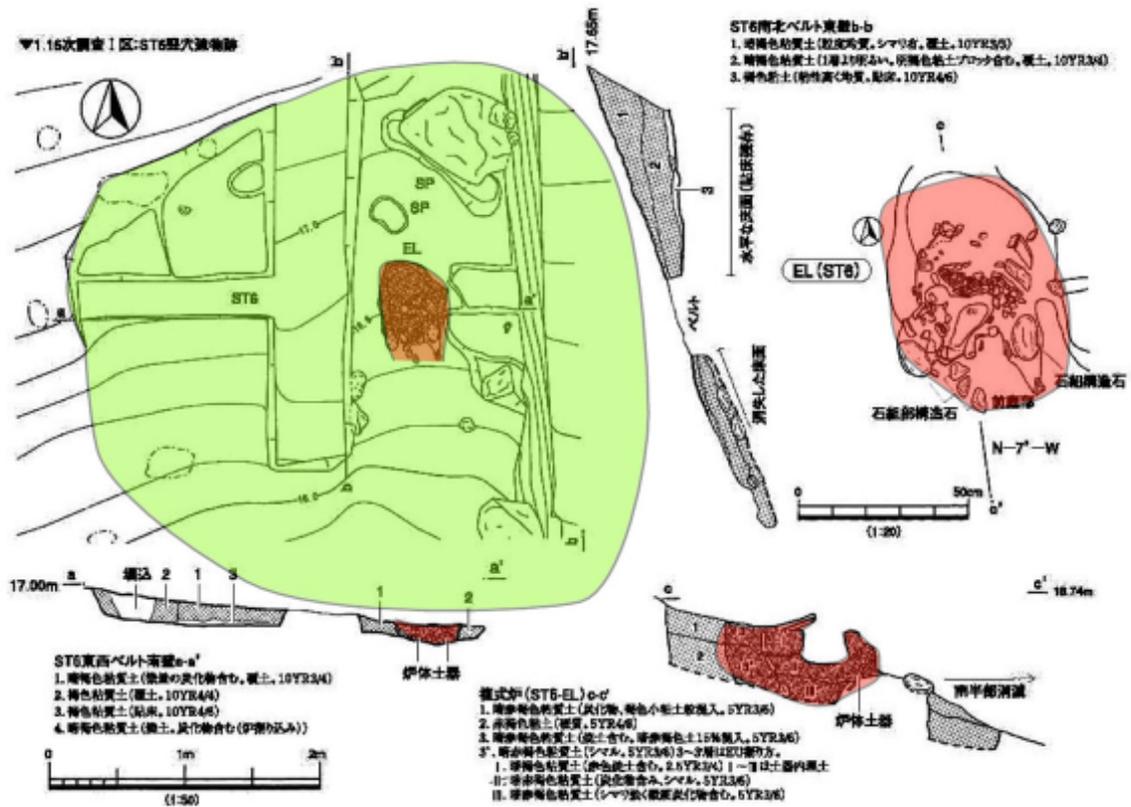


図9 16次調査 I 区 ST6平面・断面図

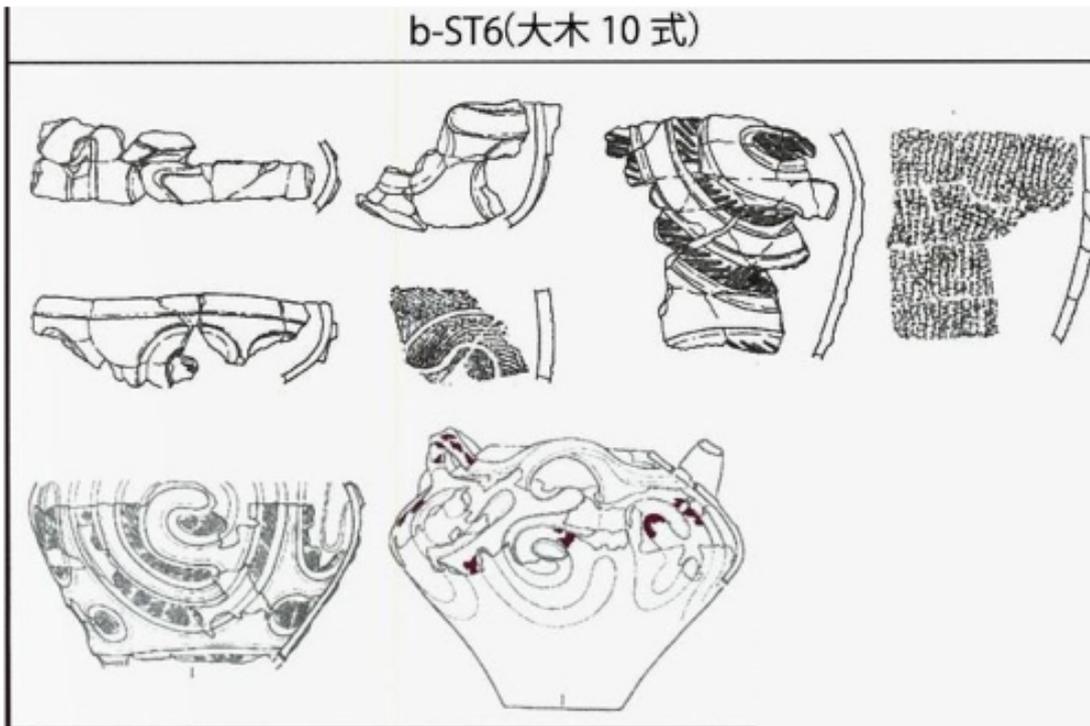


図10 16次調査 I 区 ST6出土土器

### 小山崎遺跡の縄文時代中期の調査成果の総括

鳥海南麓西部の拠点集落は吹浦遺跡（前期末）を経て、柴燈林遺跡（中期中葉）から中期後葉に小山崎遺跡へ回帰する。海退の影響で低地西部の開発が始まる。同時に斜面地に集落展開。低地では中期も動物遺体を伴うが、数は少なく前期と混在するため分離は不能である。イノシシ・ニホンジカ主

体の状況は前期と概ね共通する。

種実遺体で栽培の可能性のあるヒエ属検出した。利用痕跡のある種実にはオニグルミ、クリ、コナラ属、トチノキ。利用可能できる種子にはエゴノキ、ハクウンボク、ニワトコがある。前期同様にコナラ、オニグルミの利用多いが、クリが増加する。その他トチノキも利用が始まったようだ。

中期の栽培の可能性のある植物としては中期中葉～後期前葉にかけてはアサがあり、中期中葉～後期中葉まで断続的にヒエ属が出土している。台地ではブナが減少し、クリが増加し、ケヤキも伴う。落葉広葉樹林が広がり、クリは栽培されていた可能性がある。

明確な中期の石器は竪穴建物出土資料に限定されるが、数は多くはない。大型の礫石器を前期に続き使用している。

中期の骨角器は出土していない。

中期小山崎人の動態は以下のようにまとめられる。

縄文時代中期では、北陸系の新保式土器、大木8a、8b式土器が低地東部で発見されるが大木7a、7b式土器はない。この時期の拠点集落は、吹浦遺跡から、小山崎遺跡に隣接する柴燈林遺跡に移動する。この遺跡は大木7a式から8b式期の比較的規模の大きな集落で、信濃川中流域に分布が集中する火焰型土器の上半部が発見されている。

試掘調査で台地上だけでなく、丸池北方の斜面まで遺跡範囲が広がっていることが確認された。

この時期は、海退により海岸線がさらに下がり、遺跡低地西部は海とはほぼ隔離された止水域へと環境が変化した。しかし、前期同様に土地の利用は困難であったため遺物はほとんど確認できない。

中期末葉になると、居住域が柴燈林遺跡から小山崎遺跡の斜面部へ移動した。竪穴住居には複式炉が備えられ、建替えが行われる。なお、竪穴住居跡が確認できるのは中期末葉の大木10式期からであり、これと対応して、低地西部でも大木10式期の遺物が確認される。低地の高標高地は、時々乾く利用可能な状態にあったが、低標高地でも海退に伴い砂礫堆積が進んだ影響か、地盤が安定して、土地の利用が可能になったと考えられる。

明確な捨て場が形成され、道路状遺構の基礎構造の可能性のある木材など台地に近い地点から水辺の整備が始まる。この時期に初めて「斜面部の居住域」と「低地部の水辺作業域」の双方で同調した活動痕跡が確認できる。

中期初頭～中期後葉後半の土器の分布から見た活動範囲を図に示すと次のようになる。

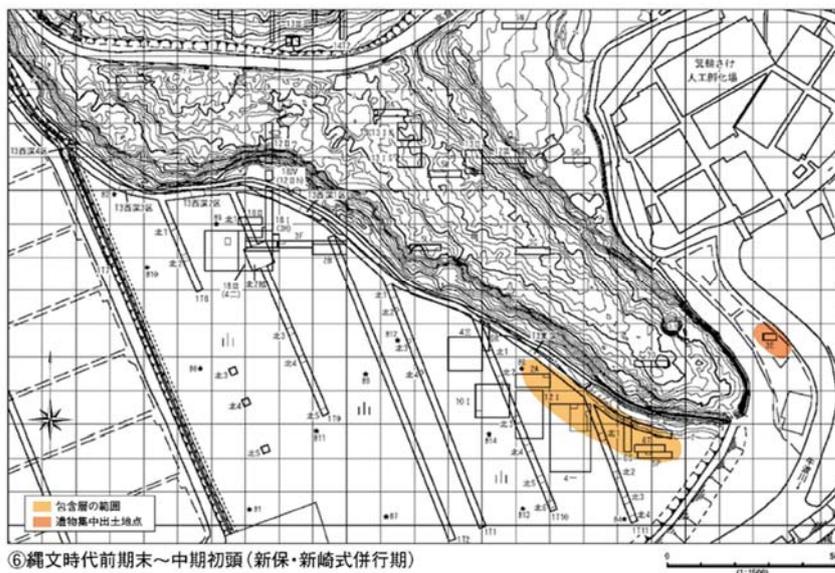


図11 前期末葉から中期初頭の活動範囲

中期初頭の新保・新崎期では前期中葉期及び後・末葉期に比べ規模が縮小し、舌状丘陵先端を取り巻く形で分布する。

丘陵西側低地には幅約50m、南北約10mにわたって帯状に包含層が分布するが、尾根を越えた3次E区のIVb層で大量の北陸系の土器が、土偶を伴って集中的に出土し、特異な様相を示す。

現牛渡川の傍の矮小な平坦地である3次E区は、丘陵から約10mで、低地への落ち際（低地の背後に広がる台地との境界付近）である。IV層の土壌は褐色砂混じり泥炭であり、河道に近かったことを示している。

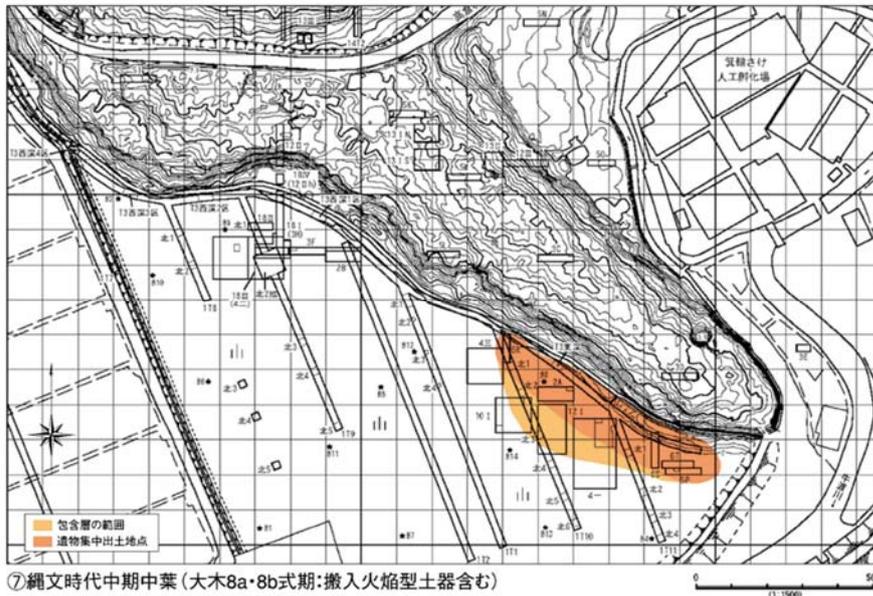


図12 縄文時代中期中葉の活動範囲

中期中葉に入ると中期初頭に比べ低地西側（4次三区、6次R区付近まで）へ包含層が拡大するが、低地西部への進出は始まっていない。

集落は、台地上の柴燈林遺跡に拠点が存在する。集落規模が大きく、特記すべきは丸池北方斜面への遺構群の進出である。2次A区VI（Ⅷ）・V（Ⅶ）層、T区IV（Ⅶ）層、P区IV（Ⅵ）層では獣骨類と加工された大型植物遺存体が共伴する。

低湿地西部では、Ⅷ層以下が無遺物層（水中堆積層）であり、低地の西半分は淡水化が進行した湖沼～沼沢地のような止水域が展開していて、生活域としての陸地の利用は低地東部の微高地に限られたと思われる。一方、丸池北方斜面地への遺構群の進出は、集落全体を俯瞰した場合、低地部の利用拡大への始動を感じさせる。

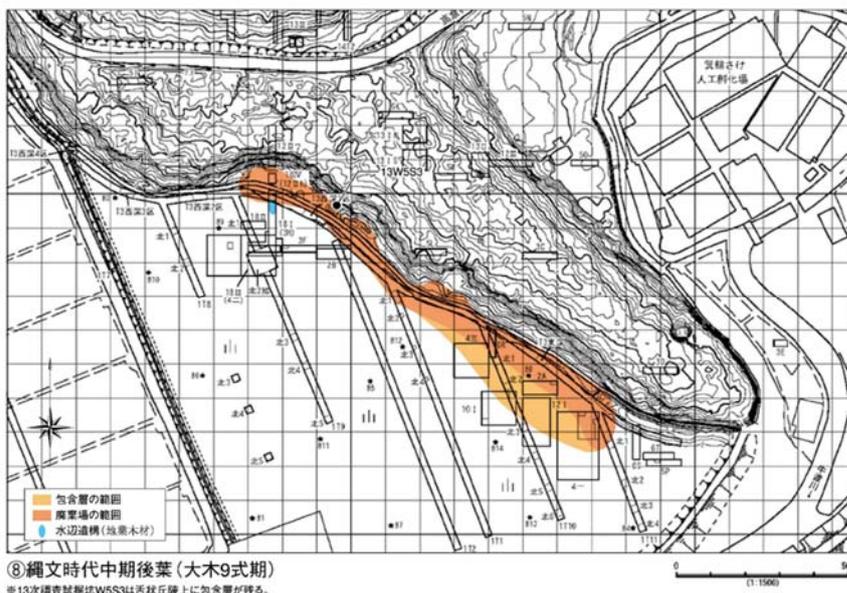


図13 縄文時代中期後葉前半の活動範囲

中期後葉前半の大木9式期の後半は水辺遺構背後の緩斜面に集落が形成され始める前夜の時期である。低湿地では初めて西部に包含層の分布が拡大する。東西幅約110m、南北10m程度の捨て場が形成される。低地部の砂質土のⅦ・Ⅵ層は、18次Ⅰ区や4次一区で人間の利用を示す動植物遺存体を伴う。一方、18次Ⅳ区は台地直下の捨て場として、一次的な投棄状態での遺物の堆積が始まる。

ここでは、獣骨は検出されるが、種実の検出は少ない。

低地へ堆積が始まる砂質層（Ⅶ・Ⅵ層）が鍵となる。砂層は牛渡川の河道が近づいたことを意味し、同時に、複式炉を備える竪穴建物群の斜面地への積極的な進出が始まる。前期後半から低湿地西部の土地利用の開始と、斜面居住域の古四王神社西方域（水辺遺構背後）への集落域進出が同時に始まっている。

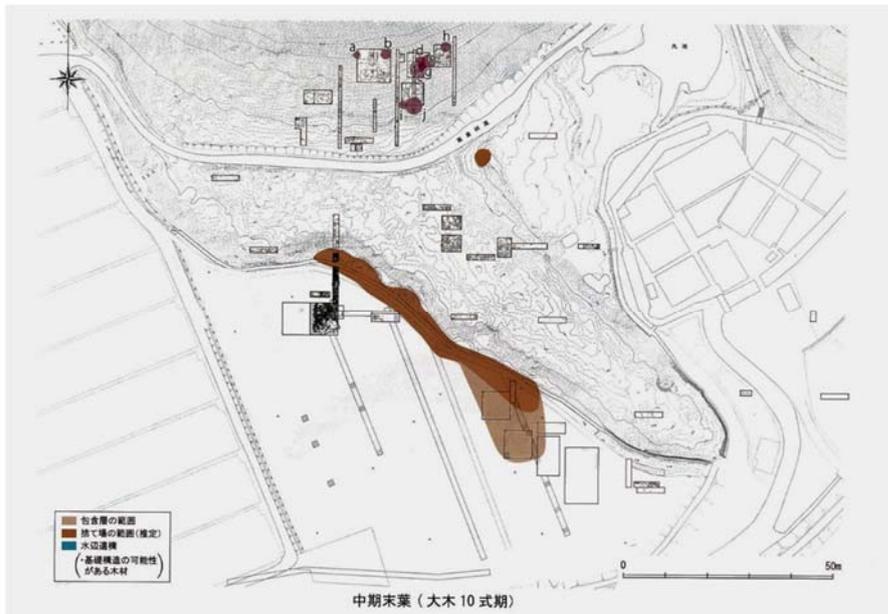


図14 縄文時代中期末葉の活動範囲

大木9式期段階に比べやや低地東部での範囲が縮小する。他は大きな違いはない。1次T10北1区Ⅷ層や18次Ⅳ区Ⅵ層では加工のある大型植物遺存体が伴出している。

斜面地での集落展開が進む。低地の積極的な利用はまだ見られないが、潟湖の淡水化が進行し、台地に近い部分から離水、低地西部の土地利用が開始されたと考えられる。18次Ⅰ区北端の敷石下の砂層で確認された木材は、人為性は不明であるが、敷石構築のための地業材の可能性はある。

台地に沿って広がる廃棄場は、主に、この時期に形成された浅い沢が使われているが、台地の直下には分布しない地点（18次Ⅳ区）がある。

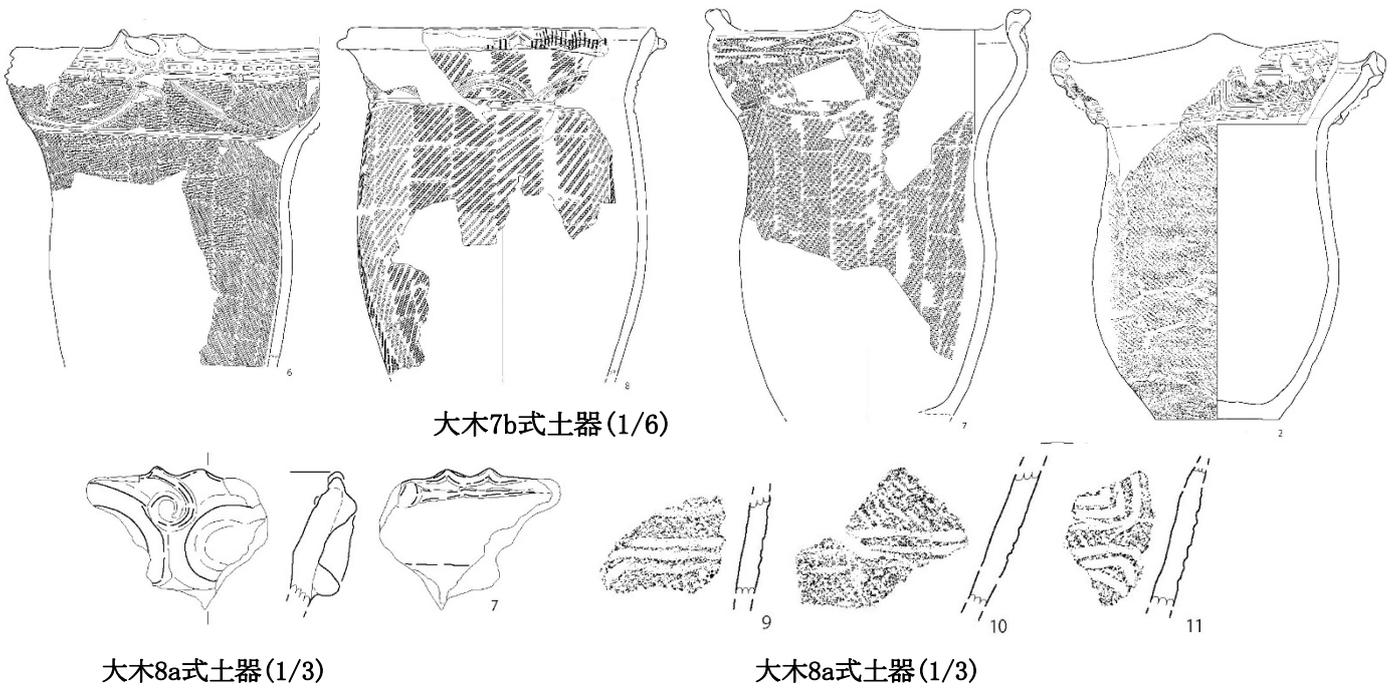
## (5) 中期の杉沢C遺跡

遺跡の所在地は飽海郡遊佐町杉沢字北ノ前地内である。農地整備事業（経営体育成型）杉沢前田地区の事業施行にあたって山形県の試掘調査を経て、令和2年8月18日～11月25日に第1次の発掘調査が翌令和3年6月22日～9月10日には第2次発掘調査が（公財）山形県埋蔵文化財センターによって行われた。縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構や遺物が発見された。

縄文時代の遺構として、晩期後葉～末葉の土坑2基、縄文時代晩期後葉～末葉の土器埋設遺構1基、縄文時代晩期後葉～末葉の性格不明遺構1基、捨て場などが確認された。

縄文土器は中期の大木7b式土器から後期・晩期に至るまでかなりの時間幅があり、Ⅰ群から□群まで細分された。

Ⅰ群土器はC区424 - 088のⅣ層から出土した大木7b式土器で、今回の展示品である。□群土器は大木8a式土器であるが、量的には少ない。



大木7b式土器(1/6)

大木8a式土器(1/3)

大木8a式土器(1/3)

図15 杉沢C遺跡の中期前葉・中葉の土器

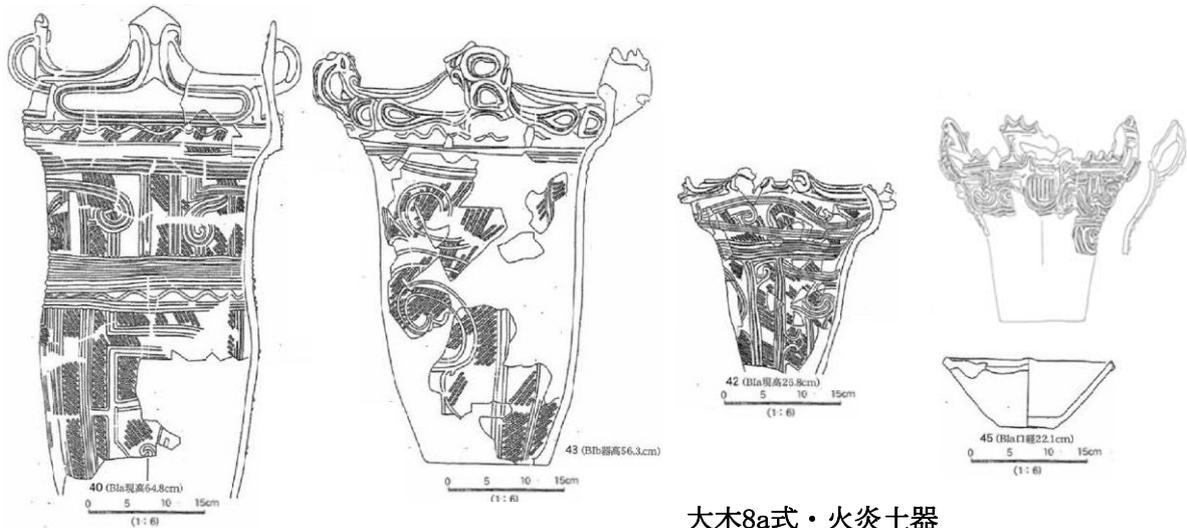
### (6) 柴燈林遺跡

遺跡の所在地は飽海郡遊佐町大字吹浦字柴燈林である。昭和30年に刊行された吹浦遺跡の発掘調査報告書にも記載されている遺跡で大木8a、8b式の土器や石器が出土する遺跡として知られていた。

小山崎遺跡の関連調査として平成15年7月7日～7月31日に176ヶ所の試掘調査が平成15年10月20日～11月9日に確認調査とよばれた2×10mのトレンチの発掘調査が実施された。また、平成19年に行われた小山崎遺跡の第14次調査の丸池北の試掘調査で遺跡範囲は拡大した。

トレンチ調査で、その層序は1層が厚さ5～12cmの黒褐色腐植土、2層が0～24cmで暗褐色耕作土、3層が0～25cmで締りのある暗褐色土、4層が16～32cmで炭化物を含んだ暗褐色土、5層が13～35cmで遺物と炭片の多い黒色腐植土、6層が17～38cmで粘りのある漆黒腐植土、7層が褐色粘質土の漸移層となり、5層が1次的な包含層であることが確認された。

縄文時代中期中葉の土坑、埋設土器、ピット、落ち込み、土器投棄場が検出され、積み重なり、密集した状態で復元可能な土器6個体を含む大木7b式～8a式の土器片が多数出土した。この中には火炎土器も含まれている。石鏃、石匙、石篋、磨製石斧、磨石、砥石、凹石などの石器がも出土した。火炎土器が出土した最北の遺跡である。



大木8a式・火炎土器

図16 柴燈林遺跡の縄文時代中期中葉の土器

## (7) 竜沢山遺跡

遺跡の所在地は飽海郡遊佐町大字野沢字水上である。一般農道整備事業(水上地区)に伴い発掘調査は平成10年11月10日～27日に行われた。幅6～7m、長さ75mの約500㎡の調査区で竪穴住居跡2棟、落ち込み2基、柱穴200基ほどを検出した。

1号住居跡は一辺4m前後の不整な隅丸方形のプランをもつ竪穴住居跡、2号住居跡は南東側に張り出しをもつ隅丸長方形の竪穴住居跡である。1号住居の床面の南寄りに15個の河原石で形成された方形の石囲炉がある。内法で南北56cm、東西35cmの規模となる。住居北部の堆積土の1層から3個体の縄文時代中期中葉の縄文土器が出土したほか、堆積土の1層や床面から整理箱に2箱分の土器片や石鏃、石斧などが出土した。これらの多くは大木8a式から大木8b式の古段階のもので、晩期大洞BC式の土器片があった。このことから、中期の住居を切るピット等の存在が考え得るが、現地調査の段階では認識できなかった。

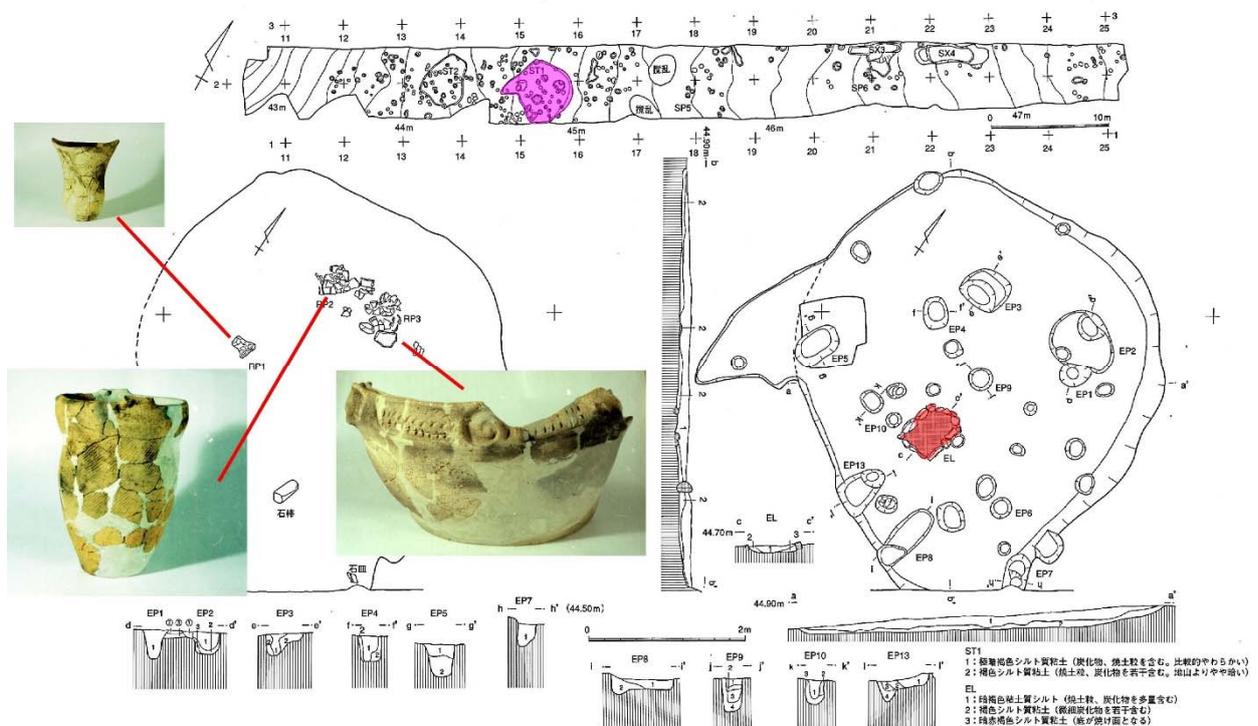


図17 竜沢山遺跡の中期中葉の遺構と出土土器

## (8) 後・晩期の小山崎遺跡

中期末葉に急斜面に竪穴住居を構築したが、後期に入っても中期末葉よりはやや標高を下げたこの地域に竪穴住居を構えていた。

同時に、この竪穴住居の住人は低地西部に水辺の遺構を設け、そこに至る湿地に石敷道路を設置した。水辺の遺構には石敷きの作業場も設けられ、木材加工や食料の加工など、水を利用した各種作業が行われていた。

また、台地下には捨て場が形成され、土器や石器、木製品、漆器、食べかすである動植物遺体などを廃棄していた。

### 小山崎の縄文時代後期の住居遺構

14次から16次調査までの調査区内で、後期前葉の竪穴住居跡及びその可能性が高い遺構が5棟検出された。また、後期中葉に属する竪穴住居跡及びその可能性が高いものも5棟検出された。

後期後葉に属する竪穴住居跡は2か所で検出しているが、いずれも部分的な調査にとどまっており、詳細は不明である。

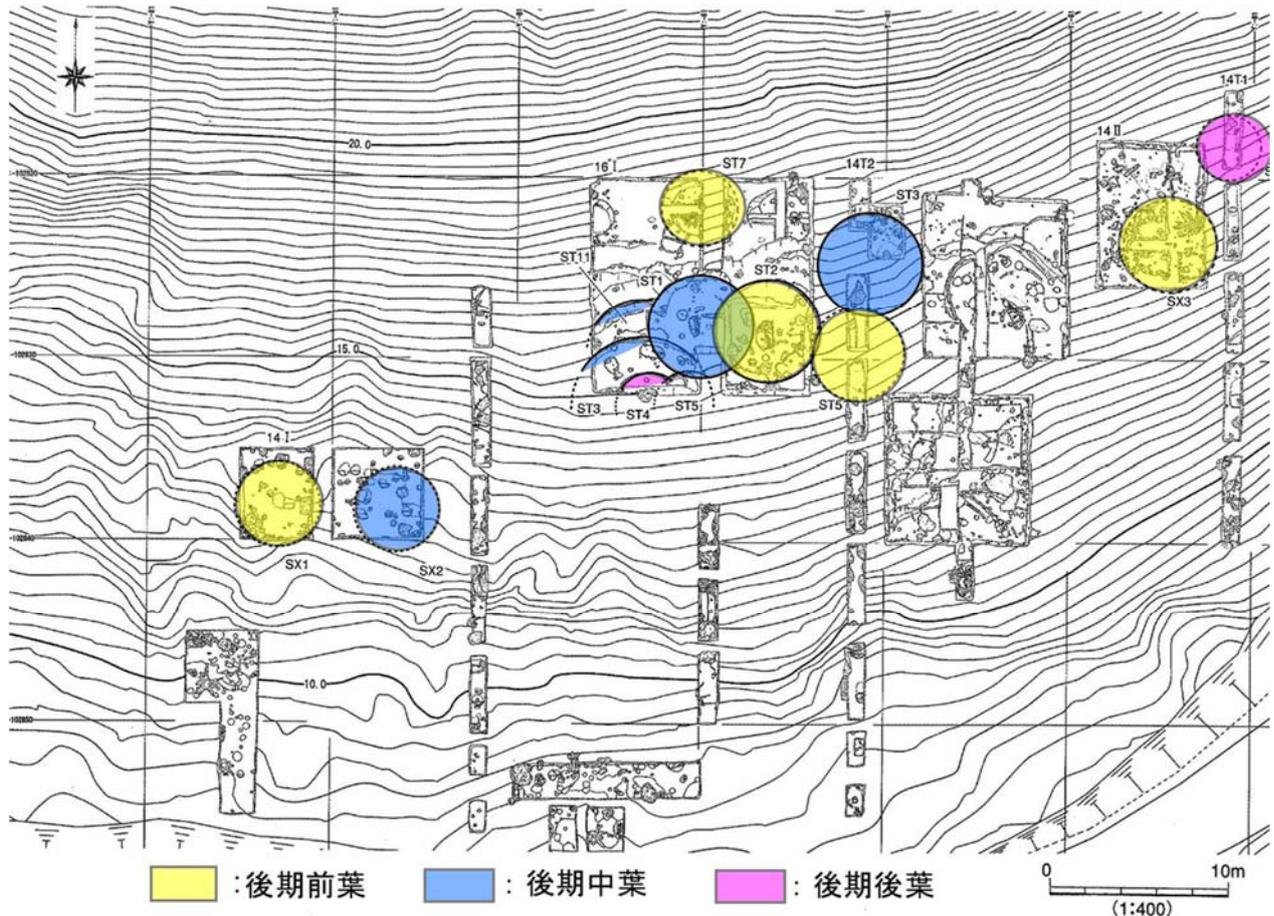


図18 後期の竪穴建物(住居)の位置

#### 16次調査 I 区 S T 2 住居跡の概要

平面形は不整円形で推定直径約5mの規模を持つ。壁の立上がりは北側切り土上部で140cmを測る。主軸方向はN-12° -Wを測り、床面は南北約3.6m、東西4.0mの範囲で硬化している。床面標高は13.68mを測り、柱穴は主柱穴の他、壁柱穴と考えられる小ピット群を検出した。

床面のほぼ中央に長軸120cmで先端部は立石状となる石囲炉がある。

Pit19で採取した炭化物の<sup>14</sup>C年代を測定したところ、3,060±30yrBPの年代となったが、新しすぎるため、検討の余地がある。

#### 16次調査 I 区 S T 7 住居跡の概要

平面形は円形で3×3.6mの規模をもつ。壁の立上がりは北壁で20cmいじょうである。床面の南半部が石敷きとなっている。小砂利敷地業の可能性がある。床面標高は17.04mを測り、床面で柱穴1基を確認した。床面中央に80×50cmの焼面があり、地床炉と考えられる。



図19 ST7出土土器

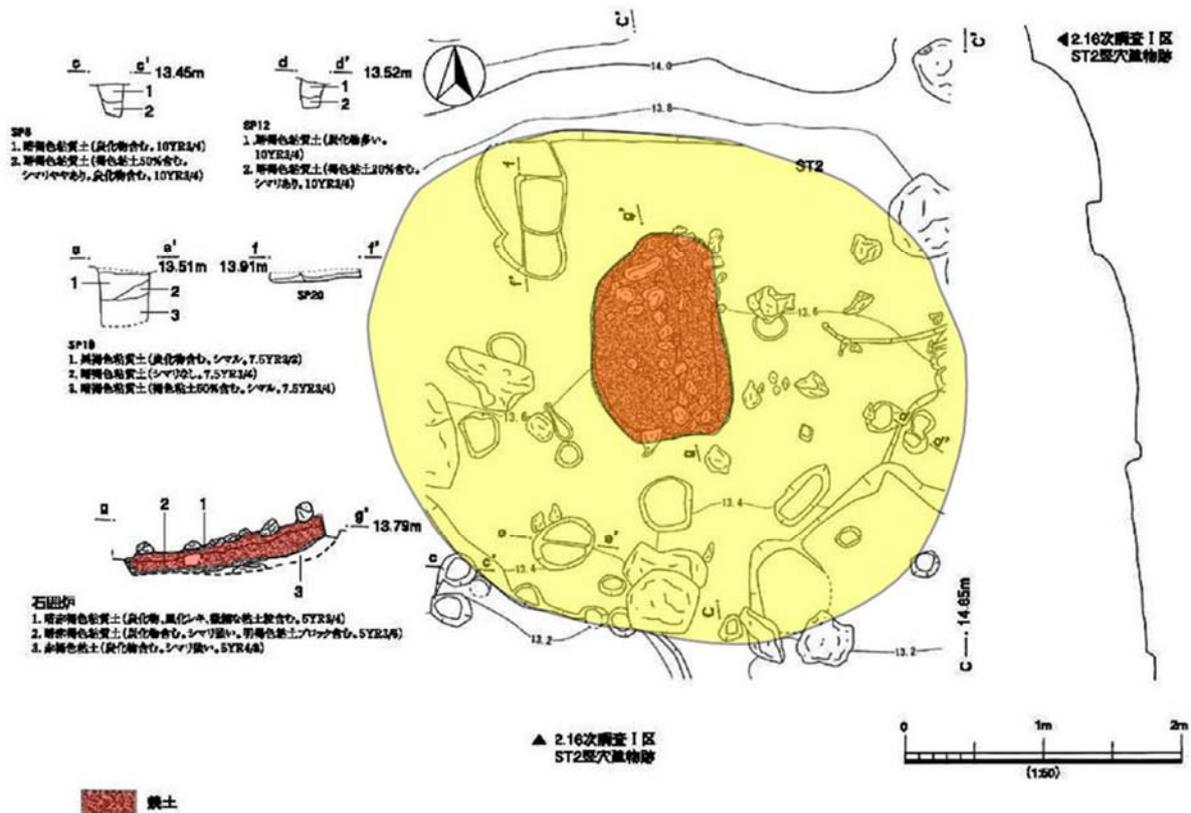


図20 16次調査I区ST2住居跡平面・断面図

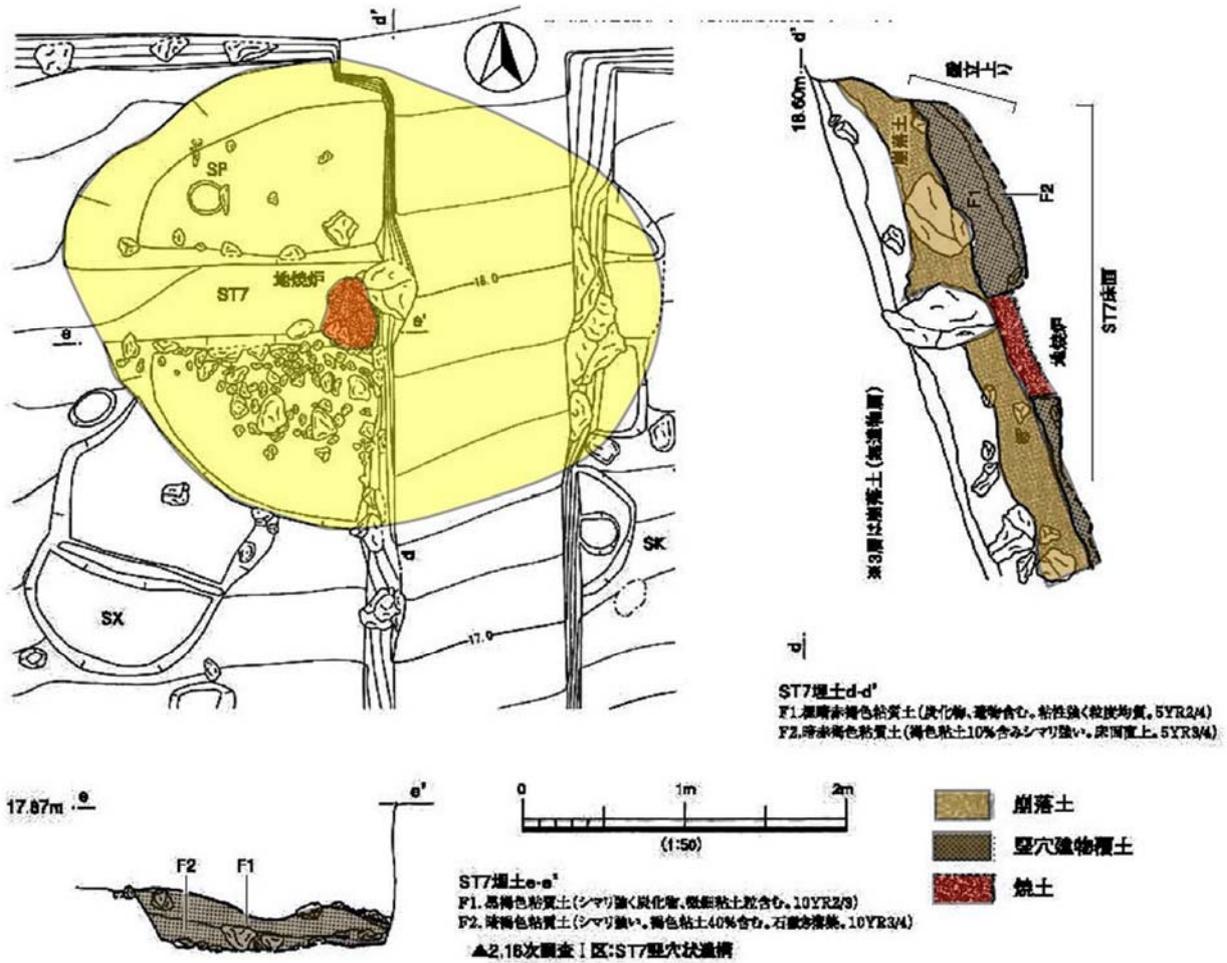


図21 16次調査I区ST7住居跡平面・断面図

### 14次 T 2 拡張区 S T 3 住居跡の概要

平面形は円形で残存部から推定して直径 3 m 程度と考えられる。壁の立上りは北壁で 50cm を測る。床面は硬化し、床面の標高は 15.01m を測る。床面で小規模なピットを多数検出した。床面中央に焼面の範囲が南北 80cm、東西 130cm を測る地床炉が検出された。

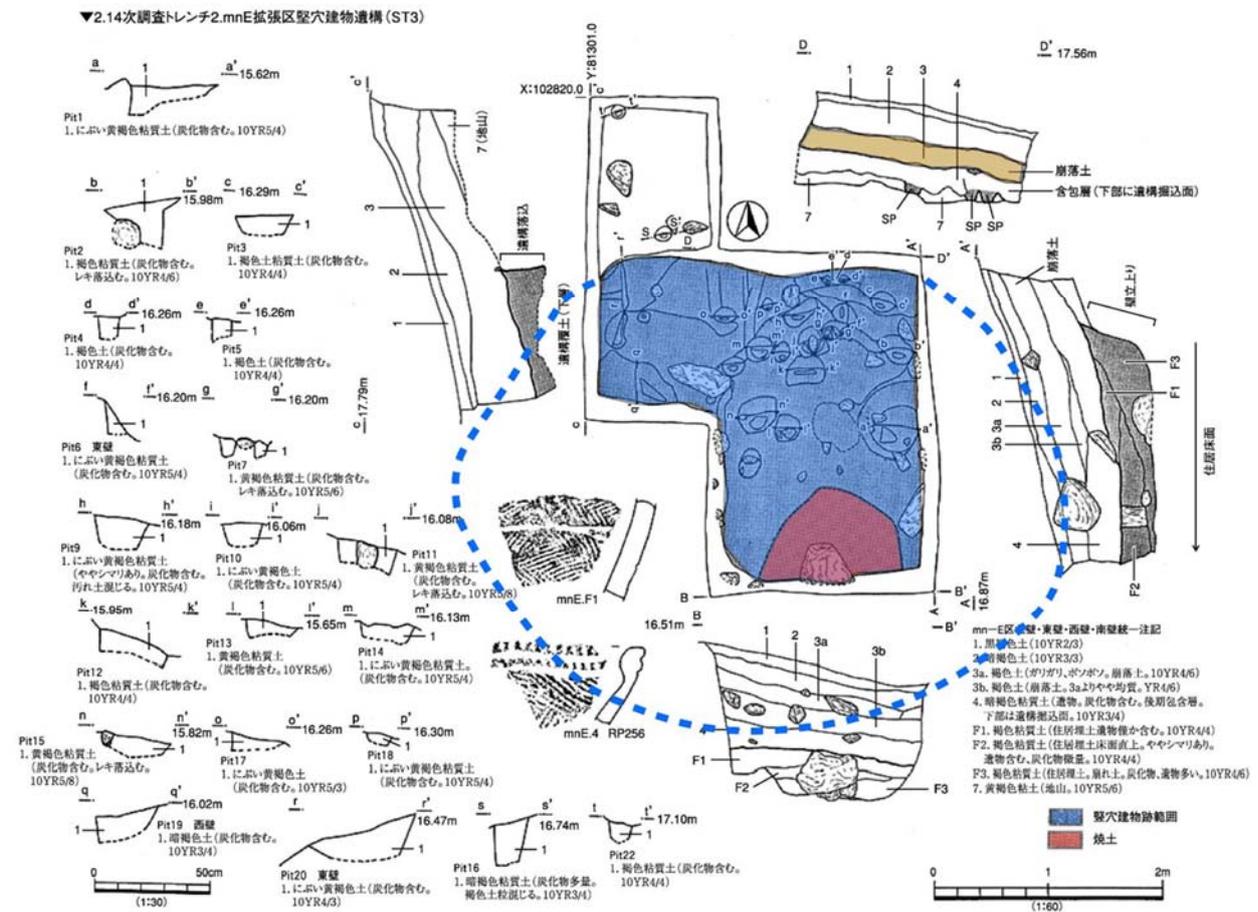


図22 14次 T 2 拡張区 S T 3 住居跡平面・断面図



図23 ST3出土土器

### 16次調査 I 区 S T 1 住居跡の概要

平面形は不整形円で、直径約 4m の規模と推定される。壁の立上りは北壁で 140cm を測る。南北 4m、東西 3.6m の水辺に造成した硬化した床面を持ち、床面標高は 14.24m を測り、支柱穴と考えられる 5 基

の柱穴を検出した。主軸方向はN-8°-Wを測る。長軸115cm の規模を持つ約20個の川原石を使った特異な石囲炉が検出された。

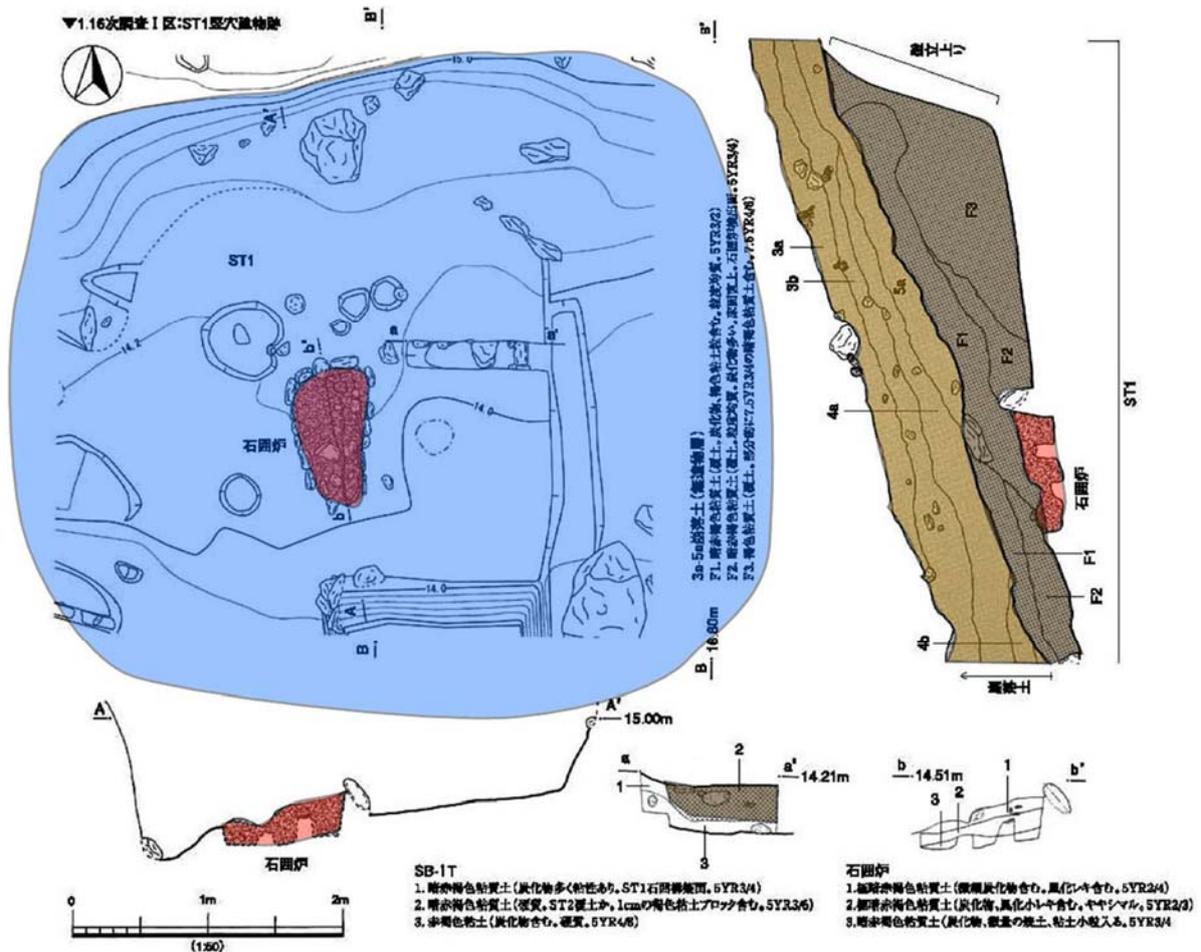


図24 16次調査 I 区 S T 1 住居跡平面・断面図



図25 ST1出土土器

### 後期の斜面住居群から出土した石器

斜面住居群を検出した後期の層準から50点の石器が出土した。

この組成を見ると、打製石器が4分の3以上を占めており、この中でも、この中でも、狩猟具である石鏃が全体の約半数を占めている。

また磨製石斧、礫石器と当該期の石器が出そろっている。

## 小山崎遺跡後期斜面集落出土石器組成

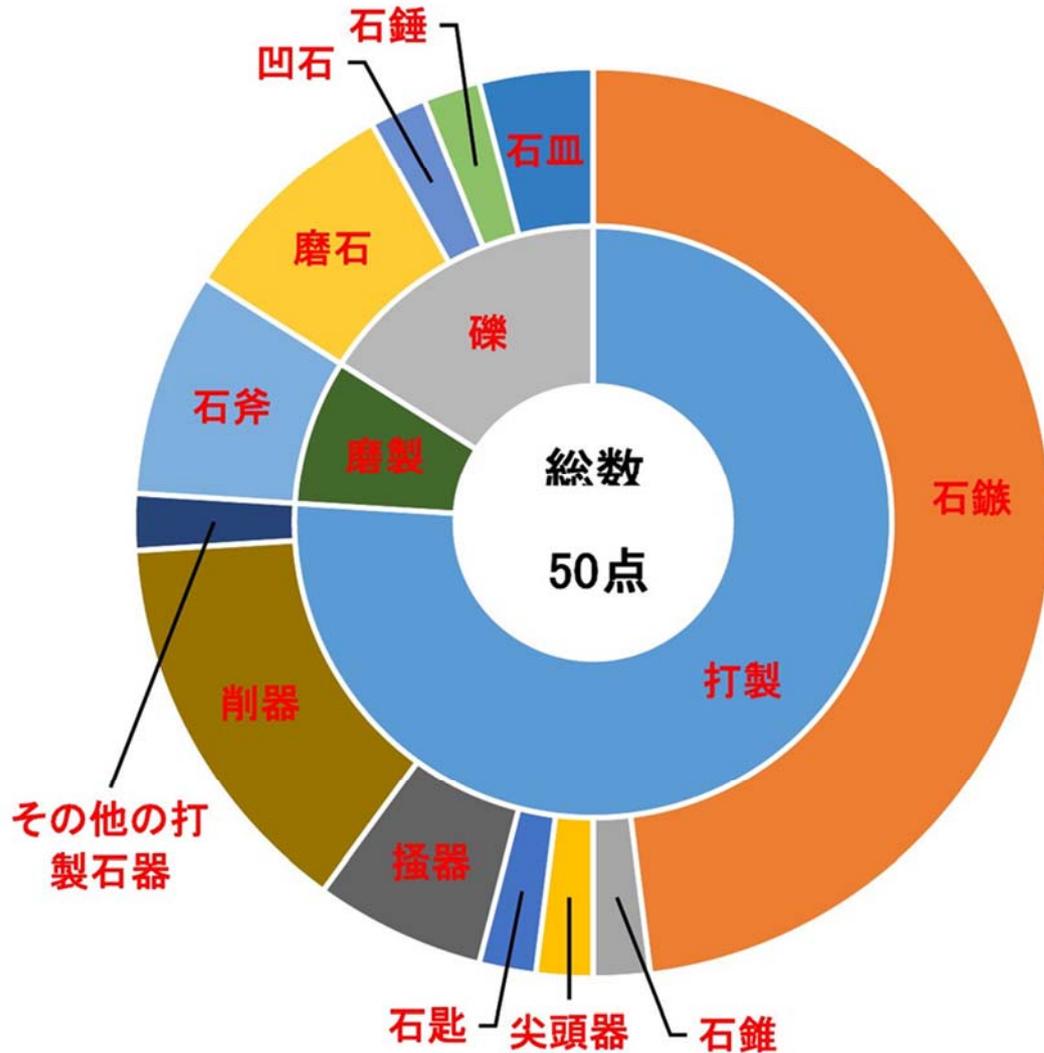


図26 小山崎遺跡後期斜面集落の石器組成

### 低地西部の水辺の遺構

小山崎遺跡の主要な遺構は低地西部にある「水辺の遺構」である。この遺構は1次、3次、4次、18次で調査が行われている。

小山崎遺跡の「水辺の遺構」は道路状遺構と敷石作業場、木敷遺構、杭列からなっている。今まで知られた「水場遺構」は沢水や湧水を利用し、トチ等のあく抜き等をした施設と考えられているが、小山崎の「水辺の遺構」は多くの機能を持っていたのではないかと考えられている。

道路状遺構は、沈下を防ぐ地業とみられる木と水辺の作業場から台地へと向かう敷石列、さらに、敷石列を覆う貼粘土が一体となった構造を持つ。

この遺構は「道」の機能を持つと考えられる。なお、4次調査で敷石列間が水路である可能性も検討されたが、流水の砂層はなく、2列の敷石列は検出層位を異にしていることから、18次調査後に水路ではないと判断された。

道路状遺構は水辺遺構中枢部から北東方向の居住域に向かって延長約23.0mを検出しており、幅は中央部で約0.6~1.0m、南端部は約2.0mと広がっている。

敷石列1と敷石列3が確認されているが、層位的に新しい西側の敷石列1のほうが、丁寧なつくりとなっている。

第II調査区断面図 南壁

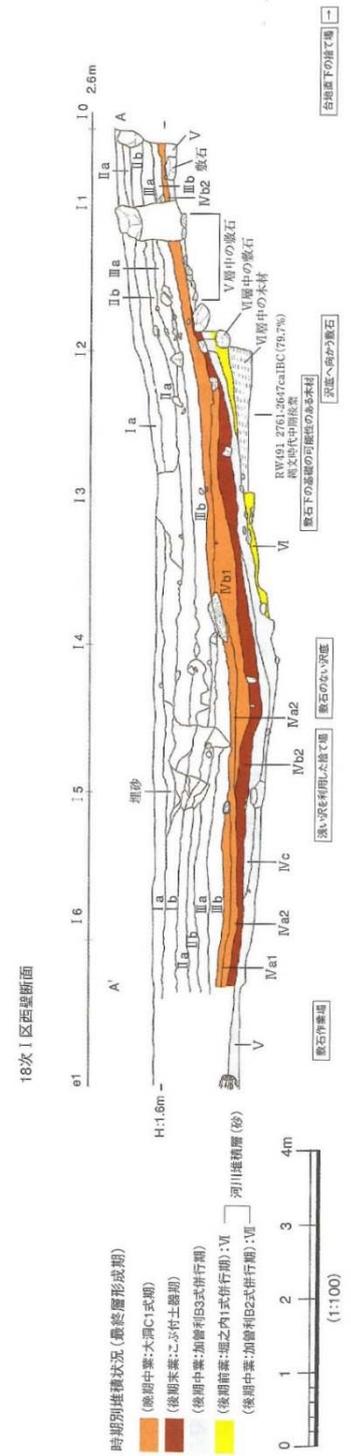
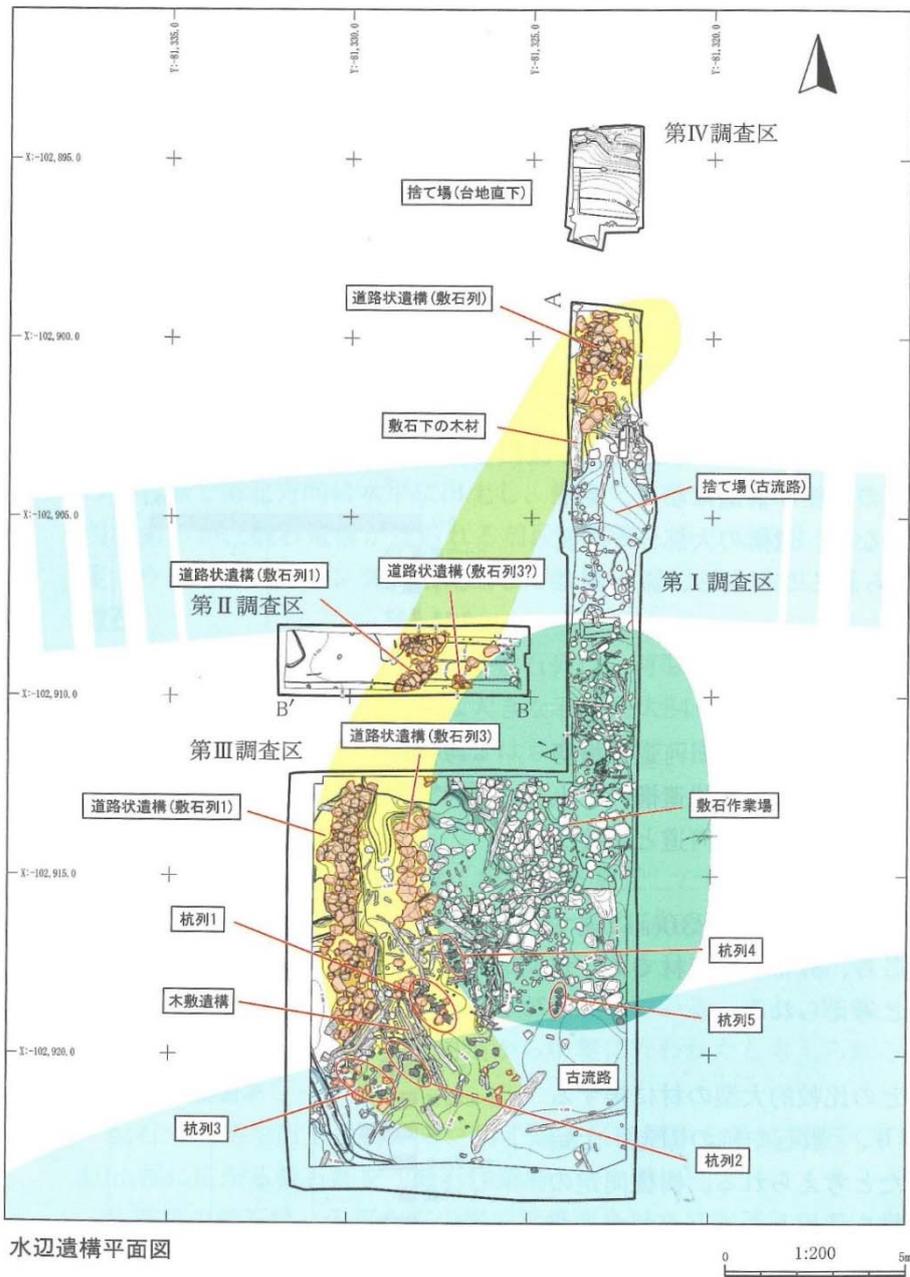
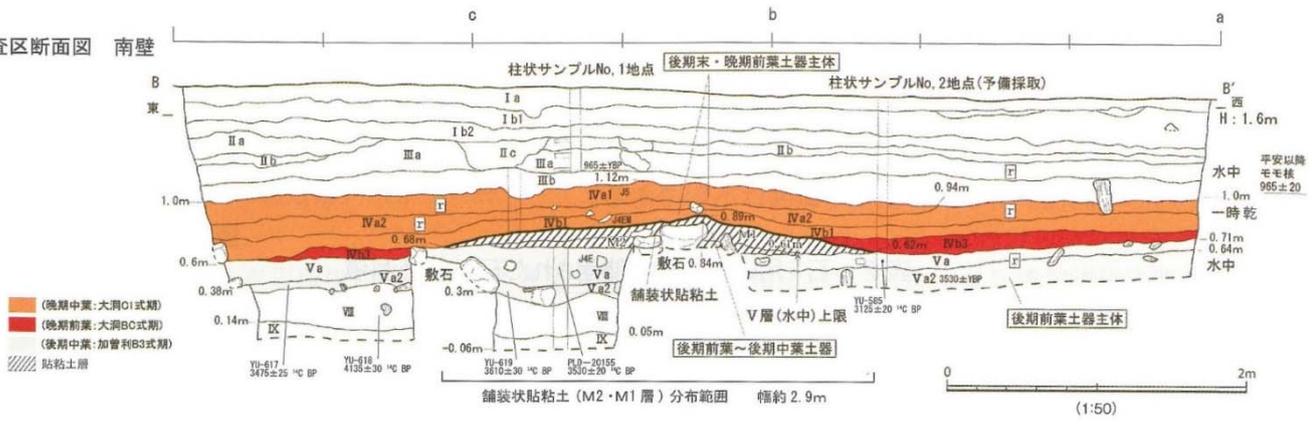


図 27 水辺遺構の平面・断面図

### 道路状遺構の構造①敷石下の木材

18次調査区Ⅰ区の北端で、敷石の下から長さ2.0m以上の木材が検出された。

水辺の遺構の主要部からいったん下がって台地に繋がるのだが、その低いところで南北方向に水平敷かれていることが判明した。また、この材に直行する小さな材もあり、道路状遺構の沈下を防ぐ地業だった可能性が高い。

木材の<sup>14</sup>C年代測定（ウイグルマッチング）を実施した結果、2,762-2,648cal. BC（80.1%）の年代範囲を示した。

### 道路状遺構の構造②敷石列

18次調査のⅠ区～Ⅲ区にかけて検出された。敷石列は、河原石の平坦面を上揃えて敷設されている。2列確認されている。敷石列1は大きな石（最大54.0cm）を外側、小ぶりの石を内側に敷詰めた丁寧なつくりである。敷石列3はさらに大型の石材（最大71.0cmの角礫）を7個南北に連ねている。

### 道路状遺構の構造③舗装状粘土

18次調査第Ⅱ調査区の南壁断面の観察で、敷石列を敷設した場所を中心に粘土の④d（M1）・④e（M2）層が厚さ約15.0cm、幅4.0mにわたって盛土状に貼られ、両端が流れたように自然に消滅する様子が確認できる。

石の上に粘土を張って舗装して歩きやすくしたのではないかと考えられる。4次調査時にも敷石列に同様の貼粘土があったことがわかっている。

貼粘土の施工は、土層から敷石の構築初期からではなく、後期前葉から中葉に行われたと考えられる。

### 敷石作業場

「敷石作業場」は18次調査第Ⅰ調査区南側から第Ⅲ調査区東側にかけて南北6.0m・東西4.0m程に広がっている。

作業場の敷石は、偏平な安山岩の平坦面を揃えて配置されており、石材の表面観察では水磨された滑らかな表面の石が多い。

これと同様の安山岩は、牛渡川の上流の現河床で豊富に確認できる。周辺で容易に入手できる石材を用いて、構築していたことが推測される。

また、敷石には廃棄された石皿も多数利用されている。敷石下には複数の木材の存在が確認され、沈下防止の機能があったかもしれない。

### 木敷遺構

18次調査第Ⅲ調査区の南西部で発見された杭列1と2に挟まれた丸太である。

長さ290.0cm、幅約60.0～70.0cmを測る。平均直径8.3cmと比較的太さが揃い、直線的な丸太材が選択されている。

材の間にはそれらを固定するように、細杭が打込まれ、丸太材の下部に長軸に直交するような材が存在する。

木敷遺構には「水さらし場」にみられる箱型の木組み構造はなく、掘下げや礫・土器敷きなども伴わない。

遺構の大部分が砂質土層の直上にみられることから、流水部における足場ではないかと考えている。

### 杭列①太杭列

太杭（杭列1～5）の直径10cm以上の太杭列は敷石列に寄り添うか、旧河道を横切るように敷設される傾向がある。

道路状遺構の「土留め・路肩補強」などの機能があったと考えられ、敷石列や旧河道と密接な関係をあつたのではないかと推測される。

太杭の直径の平均は14.1cmを測り、太いものは23.0cmに達する。32本を樹種同定したところ、87%がクリ材であった。水に強い材を選択した結果と考えられる。

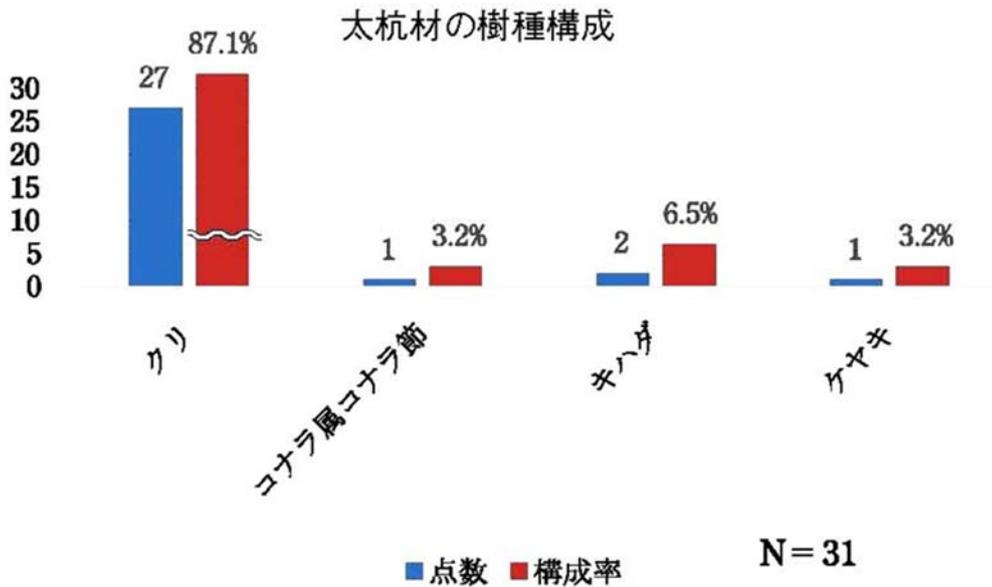


図28 杭列太材の樹種構成

#### 杭列②細杭列

敷石や太杭、木敷遺構などの比較的大型の材に接するように多数打ち込まれており、「敷石や杭の固定・土留め」などの役目を持っていたと考えられる。

樹種同定の結果、計17種類もの多様な材を使用したことがわかった。このうち、クリ材は他の樹種より10%以上も高率の24.3%である。

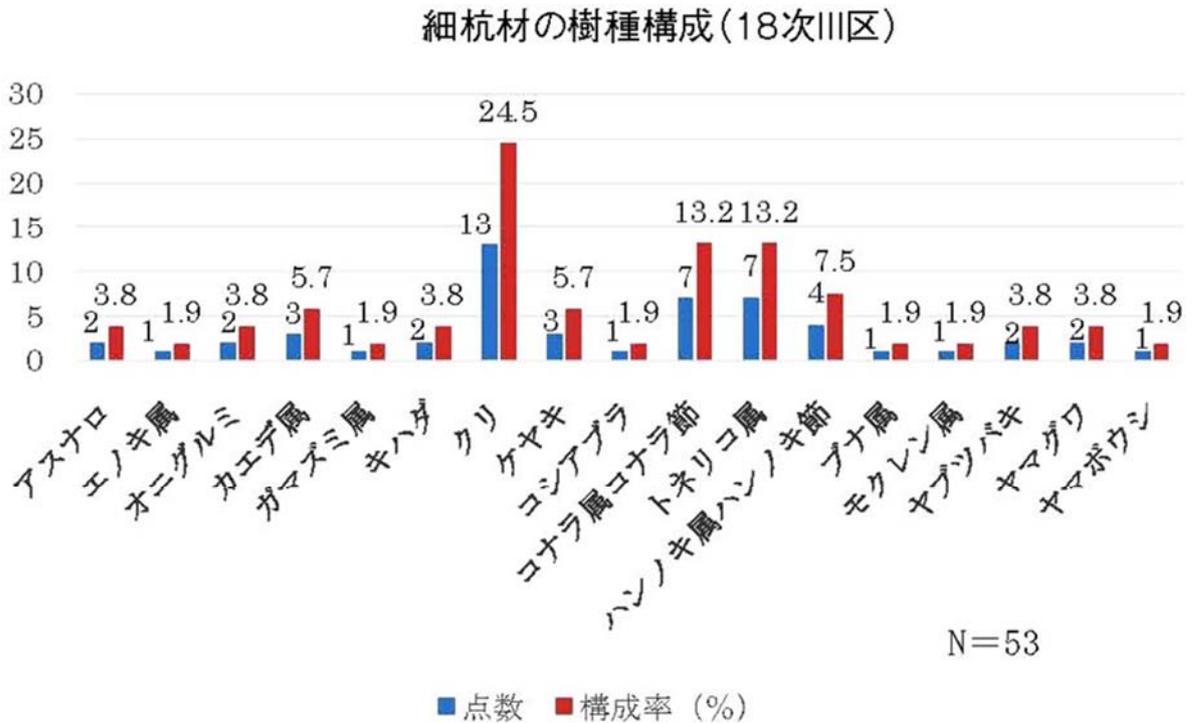


図29 杭列細杭材の樹種構成

#### 水辺遺構の機能と年代

遺構は後期前葉主体のVI・VII層段階に、台地に近い地点から沈下防止の地業とみられる木材の敷

設から始まり、その上に敷石列を構築した。

後期中葉のV層堆積時に敷石作業場や道路状遺構に加え、打込杭等の整備が完了する。

この時期の出土遺物は多量であり、最も盛んに利用された時期といえる。

また、道路状遺構は2列存在するが、構築時期には差がある。敷石列1は敷石列3と比較して層位的にやや後出的な要素を持つが、後期中葉には完成し、後期末葉・晩期前葉段階のIV層粘土の乾燥化した堆積環境に至ると衰退埋没を迎える。

敷石列3はV層中の低い層準で検出され、V層堆積後の継続的な石積みはなく、恐らく、早めにその機能を失っていたのではないかとと思われる。

敷石列1は継続して整備・利用されていた。水辺遺構全体としては、後期中葉まで使用されていたが、湿潤な環境が消えると衰退、終焉を迎える。

水辺遺構では水漬けあるいは湿地という環境を利用した作業がなされていたと考えることができる。

### 後期の捨て場

低地西部では、周囲の遺物包含層に比べて、多量の遺物がまとまって出土する地点が確認されている。当初は中期中葉までを「遺物集中範囲」、中期末葉より後を「廃棄場」と呼び、報告書総括編では時期別にその様相が記載された。

今後は、これらを遺構と捉えて、一括して「捨て場」と呼ぶ。特に動物遺存体と植物遺存体の両方を包含する層がある地点を「低湿地捨て場」とした。捨て場はトレンチ内では計17ヶ所確認され、そのうち低湿地捨て場は12ヶ所ある。主要な地点は低地西部に偏っている。このうち、特に集中が著しい次の4ヶ所を取り上げる。

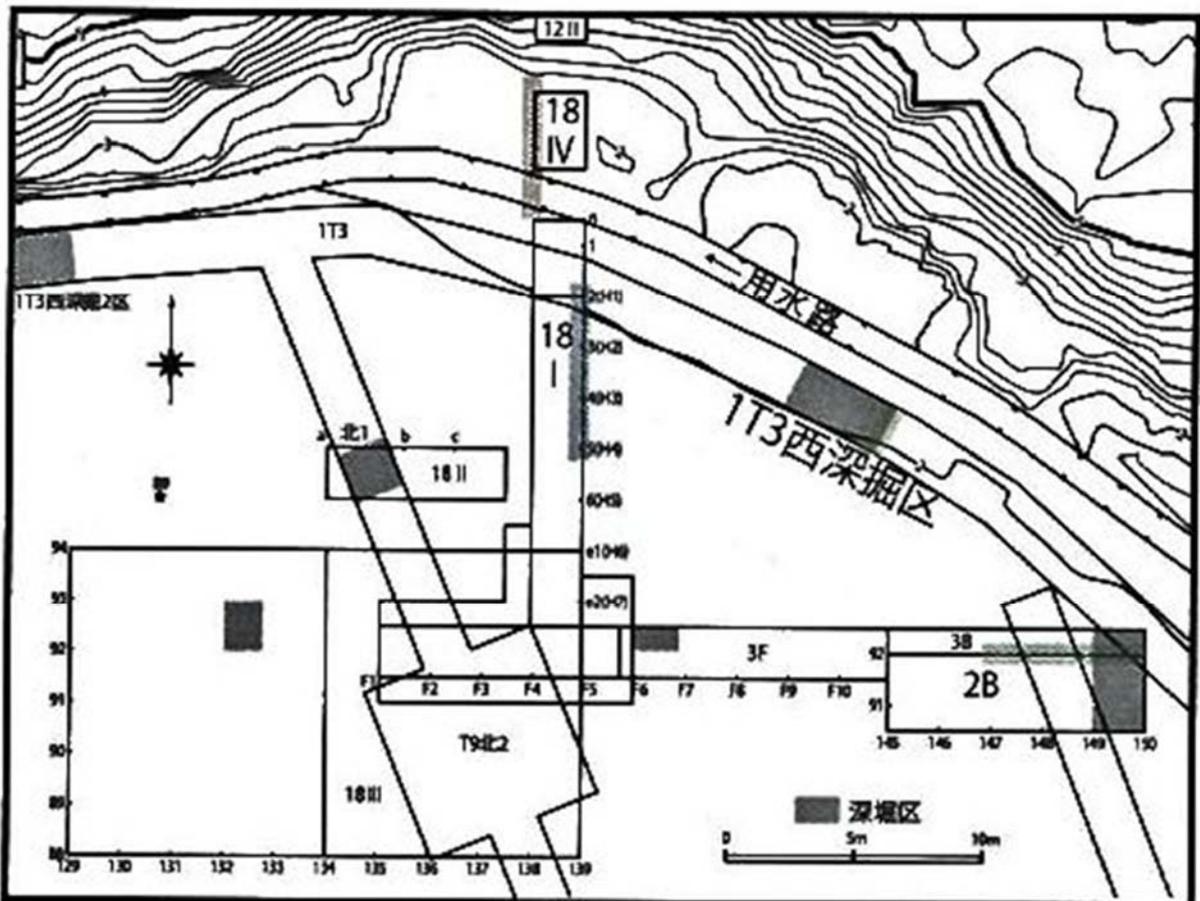


図30 後期の捨て場の位置

#### 1) 18次IV区 (12次I1h区)

舌状台地の落ち際で、水辺遺構との間に位置する。

後期前葉の⑦a層で動植物遺体が出土。後期の骨角器の多くはここで出土した。動物遺体は哺乳類、次いで魚骨が多く、哺乳類はほとんどがシカ・イノシシ、魚骨はタイ科が多く、サケ科・トゲウオ科なども出土した。

また、利用痕跡のある種実とは、炭化したオニグルミ・クリ・ブナ科・トチノキが出土した。この地点では、多量の寄生虫卵が確認された。

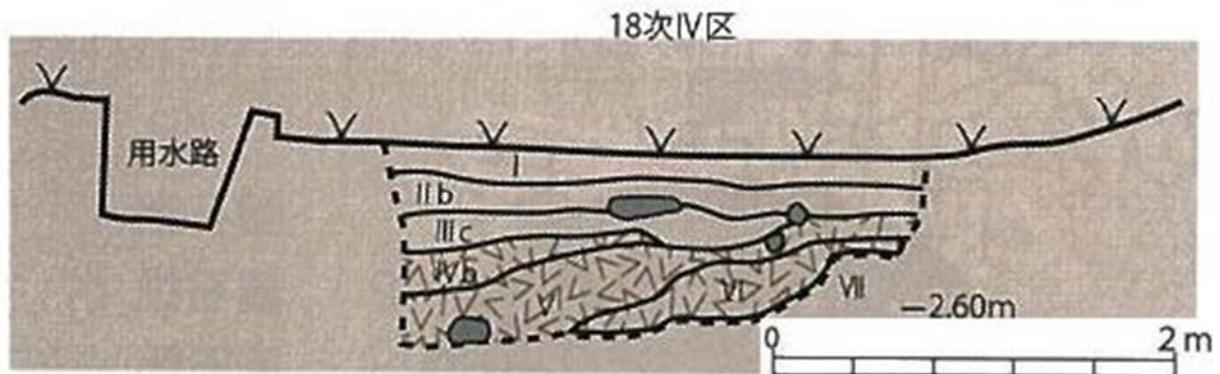


図31 18次IV区の捨て場断面図

### 2) 18次I区の捨て場

水辺遺構内の北側に位置する。遺跡最盛期の縄文時代後期中葉と衰退期の晩期に捨て場として利用された。

動植物遺体の両方が確認できるのはIVa層、IVb1層、VI層である。動物遺体で最も多い種がイノシシとシカで、魚骨ではサケ科が最も多く出土した

特徴的な植物遺体としては、アサやヒエ属が確認された。この地点では東西に横切る形で砂層が確認され、浅い沢が西に流れていたと推測される。

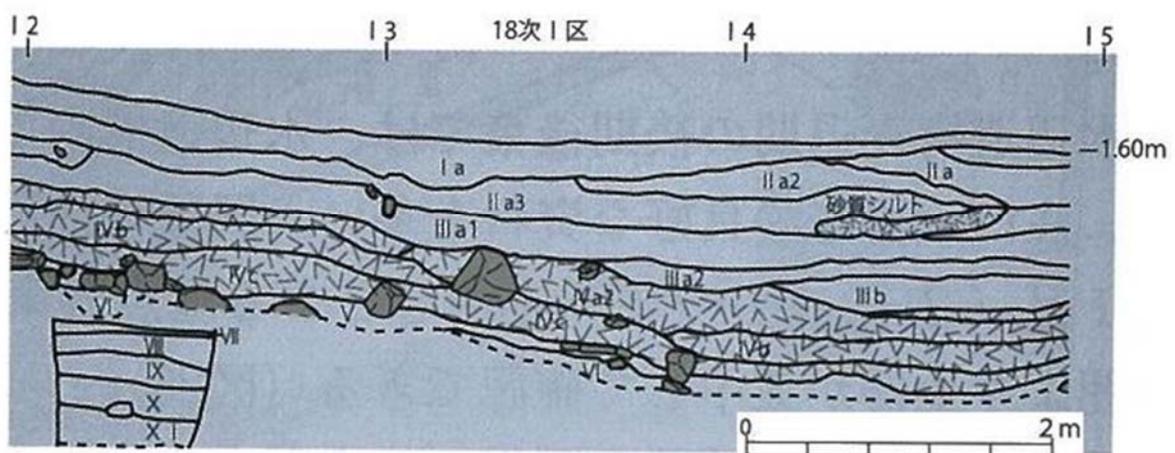


図32 18次I区の捨て場断面図

### 3) 2次B区捨て場

水辺遺構の東側に位置する。縄文時代後期初頭のVI層から晩期前葉のIII層まで、捨て場として継続的に利用された。III層からは人骨片が3点発見された。海獣類やクジラ類など他地点であまり出土しない資料が確認できる。

低地西部で動物遺存体の破片数・種類が最も多い地点である。

植物遺体は利用痕跡のあるトチノミ・クルミなどの堅果類が多い。

またVIa層では、18次IV区の捨て場同様に寄生虫卵が確認された。VIb層に砂礫が含まれ、河道に近い後背湿地であったと考えられる。

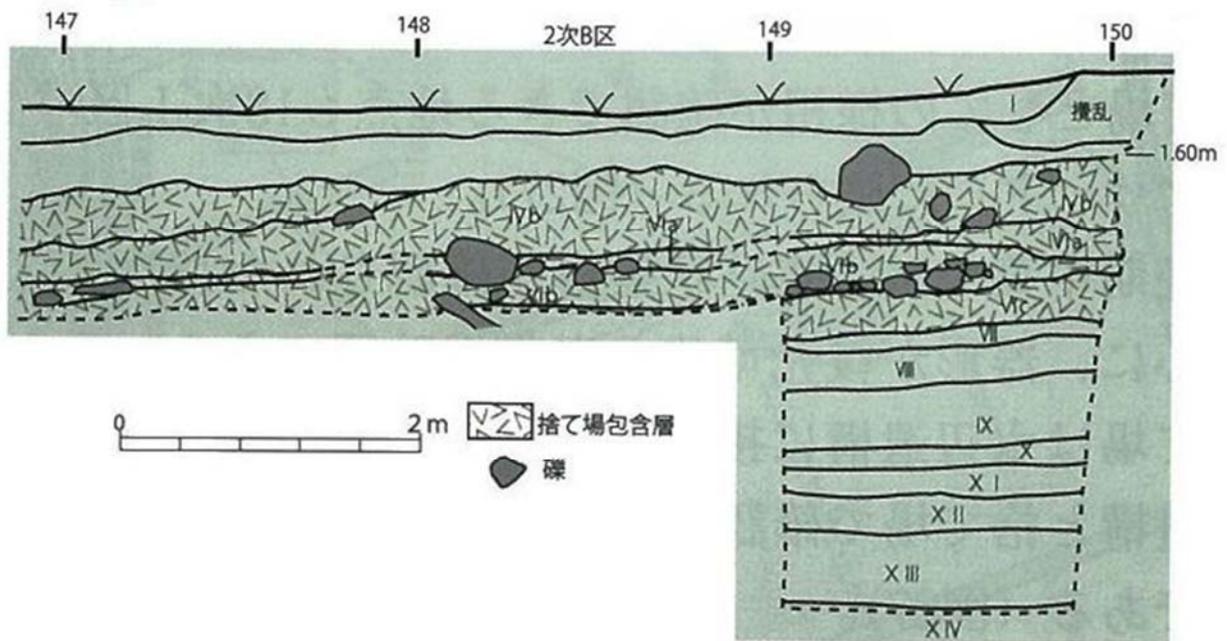


図33 2次B区捨て場断面図

#### 4) 1次T3西深堀1区

舌状台地と低地部との境にある。後期前葉のVI・VII・VIII・IX層とX層が捨て場としての堆積である。

X層で人骨片が2点出土し、獣骨ではシカとイノシシ、魚骨ではマダイ亜科が最も多い。フルイを用いた遺物の取上げを行っていない。目視での取り上げのため、魚骨等小さな骨は見逃した可能性が高い。

トチノミ、クルミなどの植物遺存体も多量に出上した。段掘りをおこなっており、VI層以下の発掘面積は2㎡弱にとどまっている。

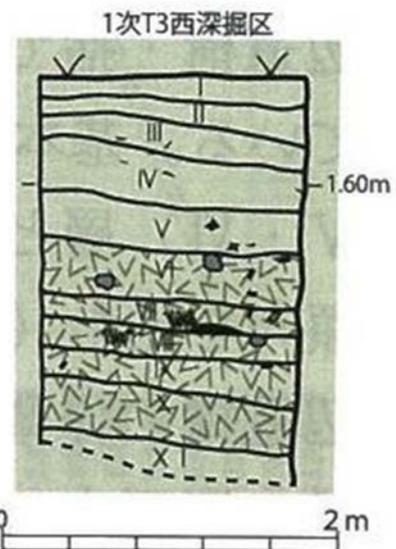
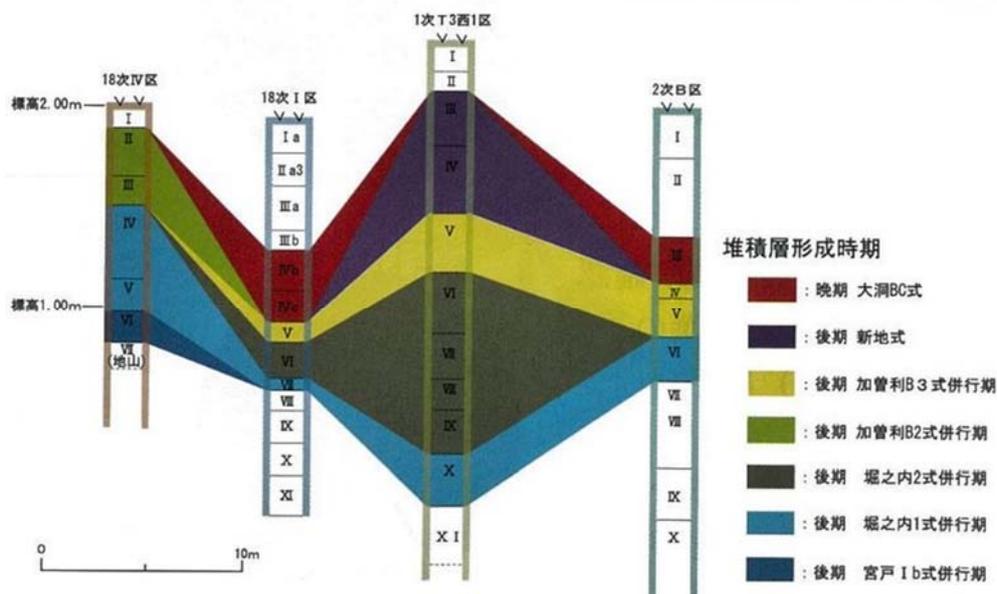


図34 1次T3西深堀1区捨て場断面図



第35図 各捨て場の堆積層の形成時期

### 低地西部の土器の変遷

低地西部の捨て場を中心とした土器の変遷は辻のとおりである。



図36 後期初頭から中葉の土器

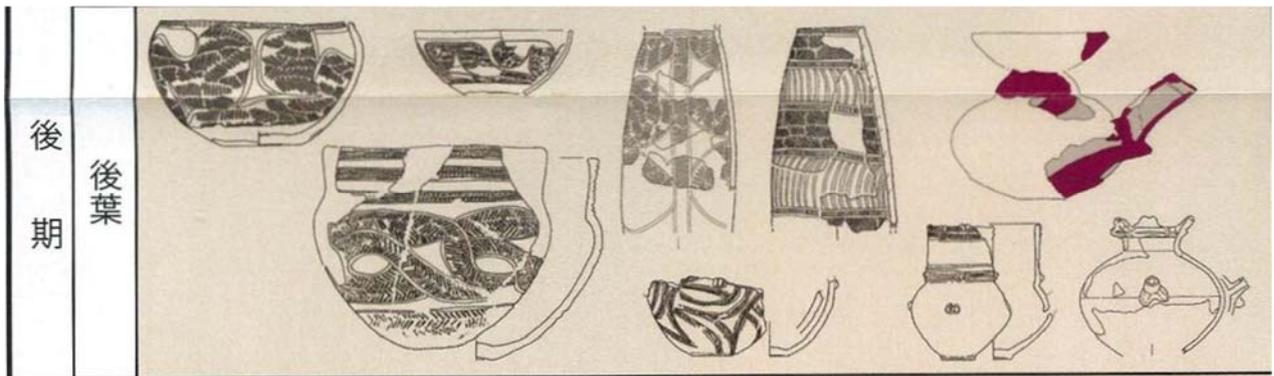


図37 後期後葉の土器

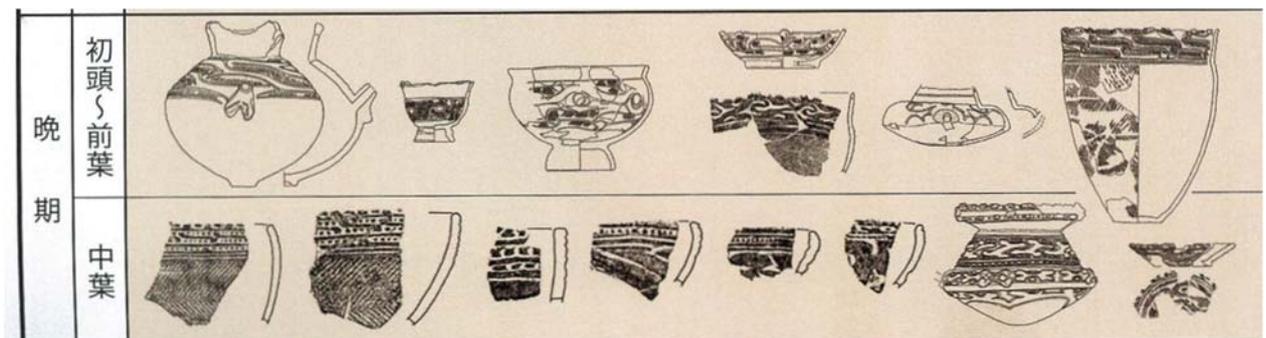


図38 晩期の土器

### 低地西部の石器組成

水辺遺構の作業場やその付近では、磨製石斧やその未成品、磨石をのせた状態をとどめた石皿などが出土した。磨製石斧は小型を含め18点出土しており、ほとんどが破損した状態で、破片も多く含む。

水辺遺構内では最盛期（後期中葉）に石鏃の出上が少なく、低地全体の全層位で確認されている734点のうち、11点と1.5%にとどまる。

ほかの地点と比べて、狩猟具の石鏃が明らかに少なく、水辺遺構は狩猟との関連が薄かった。

一方、捨て場では石鏃が64点と水辺遺構の6倍、石錐も10倍以上の点数が確認された。

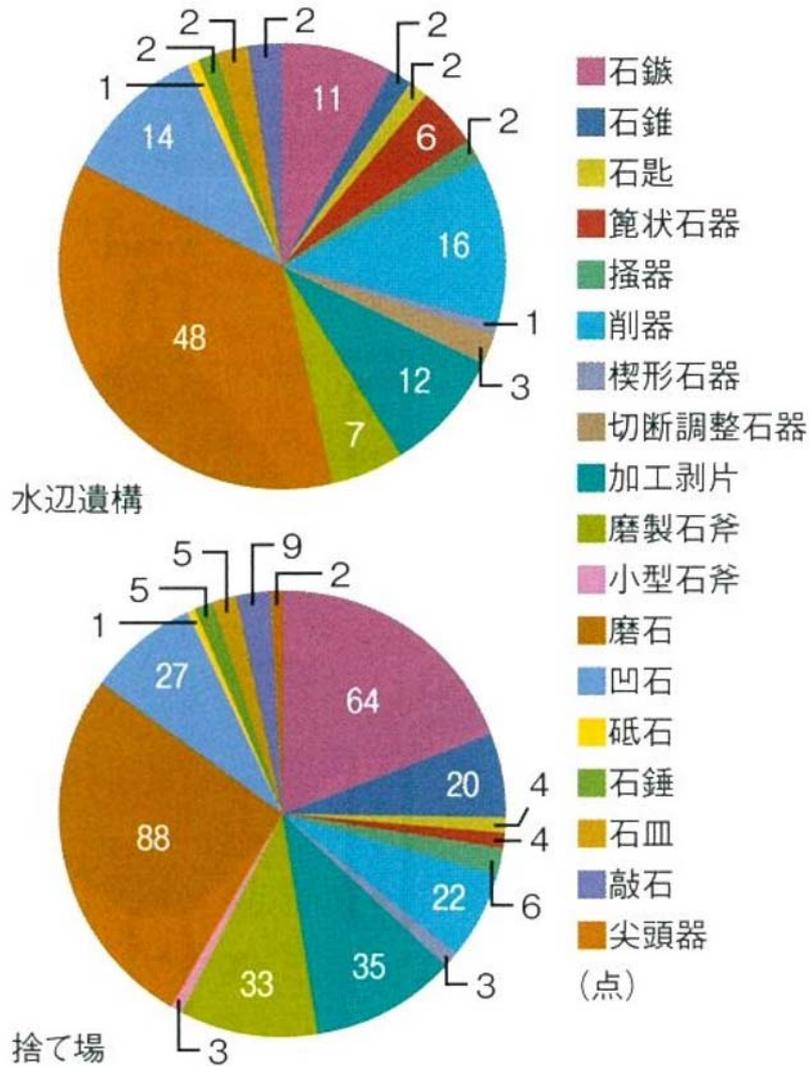


図39 低地西部の石器組成

小山崎遺跡後・晩期の木製品

木製品の多くは水辺遺構から、一部は捨て場で出土した。

大半は縄文時代後期前葉から中葉に属している。特に水辺遺構内の湿潤な環境が想定される層位で多く見つかることから、加工用の水漬け保存などをしていたとみられ、未成品が多いのもこのためと考えられる。

水辺遺構周辺では、全長177.0cmの擢未成品、組合せ式石斧の膝柄台部、弓筈部が残る小型弓、舟形水製品などが発見されている。捨て場からは丸水弓や視棒状木製品、組合せ式石斧台とセットで使用された留め具と考えられる木製品が出土した。



図40 擢未成品



図41 組み合わせ石斧台

## ◇小山崎遺跡の弓



小山崎遺跡からは、2点の弓が出土しました。

60はイヌガヤを使用した小型の丸木弓で、径は1.2～1.3cm程です。握り部分には剥ぎ取りの痕が残り、欠損していない一端の弓筈部分は山形に加工されています。

61もイヌガヤ製の丸木弓で、弓筈部分は端部の外側に溝を掘って作り出されています。径は1.7cm程で、削り込みが少なく、樹皮痕が残る面積が多いことから未成品とされています。

図42 小山崎遺跡の弓

### 漆関連資料

漆の関連資料は主に水辺遺構・捨て場を中心に出土した。

漆塗製品(土器・木胎漆器・繊維製品)のほか、漆貯蔵容器やパレットなどの漆の精製から塗布の工程を示す一連の用具が出土した。

漆を遺跡内で塗料に仕上げ、塗布された漆器が遺跡内で使用されていたと考えられる。

### 漆製品の特徴

赤漆塗木製容器や黒漆塗木製品、糸玉、大型高坏の断片と考えられる漆塗木製品などは優品である。特に、両端部にくびれを待つ特徴的な形状をした赤漆塗木製容器は外面は生漆・ベンガラ漆・水銀朱漆で3層の重ね塗りがされ、内面はさらに水銀朱漆が1層重なる計4層の塗膜構成が確認された。

全体的に石器で成形したとは思えないほど薄い作りで、最薄の箇所は3mmに満たない。他の遺跡ではみられない特異な形状をしており、かつ、高い技術を待っていたことを示す資料である。

大型高坏の断片と考えられる漆塗木製品は内外面漆塗りで、外側は生漆・ベンガラ漆・水銀朱漆の上にベンガラ漆3層の計6層の複雑な塗膜構成が判明した。

水銀朱漆の上にベンガラ漆が塗布されることは珍しく、ベンガラ漆の上に水銀朱漆で仕上げを施した製品に対して、一定の期間使用した後に、ベンガラ漆で塗り直して再利用した結果ではないかと考えられている。

漆器・漆塗り土器・漆容器・装飾品

表-3 小山崎遺跡出土漆製品一覧(第1次、第4次調査出土資料)

分析No.	遺物 No.	地塗 内外	加飾	塗膜構成		時代	備考
				b:下地	c:上塗		
Yk-1	No.1・外面	赤	無	無	漆/漆/Pベンガラ漆	縄文時代後期	細か〜ハパイ状ベンガラ
Yk-2	内面	赤			漆/漆/Pベンガラ漆		
Yk-3	No.2・外面	赤	無	無	漆/Pベンガラ漆/朱漆/朱漆	縄文時代後期	パイプ状ベンガラは最長17μm
Yk-4	内面	赤			漆/Pベンガラ漆/朱漆/朱漆		
Yk-5	No.3・外面	茶褐色	無	無	漆/Pベンガラ漆/朱漆/Pベンガラ/Pベンガラ漆/Pベンガラ漆	縄文時代後期〜晩期前葉	パイプ状ベンガラは最長10μm パイプ状ベンガラは最長6μm
Yk-6	内面	茶褐色			漆/Pベンガラ漆/朱漆/漆/Pベンガラ漆		
Yk-7	No.4	黒・黒	外面に赤色漆で模様	無	漆/朱漆/朱漆	縄文時代後期中葉	
Yk-8	No.5・外面赤色部分	赤、黒	外面を赤、黒で塗り分け	無	漆/ベンガラ漆	縄文時代後期中葉	ベンガラは微細な赤鉄鉱と石英粒子
Yk-9	外面黒色部分				漆		
Yk-10	内面赤色部分				漆/ベンガラ漆		
Yk-11	No.6	赤・赤	無	無	漆/Pベンガラ漆	縄文時代後期前葉	細か〜ハパイ状ベンガラ
Yk-12	RW4038・外面	黒	無	炭粉漆	漆	縄文時代後期〜晩期前葉	
Yk-13	内面	黒		炭粉漆	漆		
Yk-14	RW4048・外面	黒	無	無	漆	縄文時代後期前葉	
Yk-15	内面	黒			漆		
Yk-16	RW4052・外面	黒	無	無	漆/漆	縄文時代後期前葉	
Yk-17	内面	黒			漆/漆		
Yk-18	RW4199・外面	黒	無	炭粉漆	漆	中世	
Yk-19	内面	黒		炭粉漆	漆		
Yk-20	RW4208・外面	黒	無	炭粉漆	漆/漆/漆	中世	
Yk-21	内面	黒		炭粉漆	漆/漆/漆		

※パイプ状ベンガラはPベンガラと表示した。



図43 小山崎の漆器



図44 小山崎の漆塗り土器



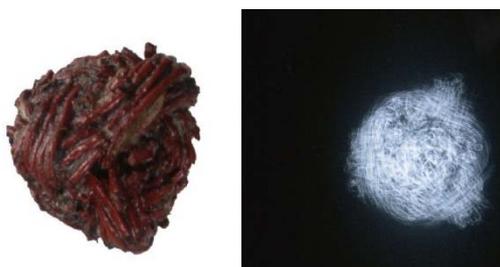
図45 小山崎遺跡の漆容器



赤漆腕輪



結歯式赤漆塗豎櫛



糸玉 図46 小山崎遺跡漆塗装身具

### 小山崎遺跡の後期の骨角器

捨て場で縄文時代後期前葉の骨角器17点が出土した。

刺突具、棒状加工品、筥、単式釣針、髪針、垂飾（垂飾状含む）などの器種があり、前期と異なり、生産用具が装飾・呪術具よりやや多い傾向を示している。

骨角器の素材は使用時に大きな力がかかるヤスや釣針は粘りのある鹿角、それ以外は加工しやすい大型獣の四肢骨を使用するなどの使い分けがあった。

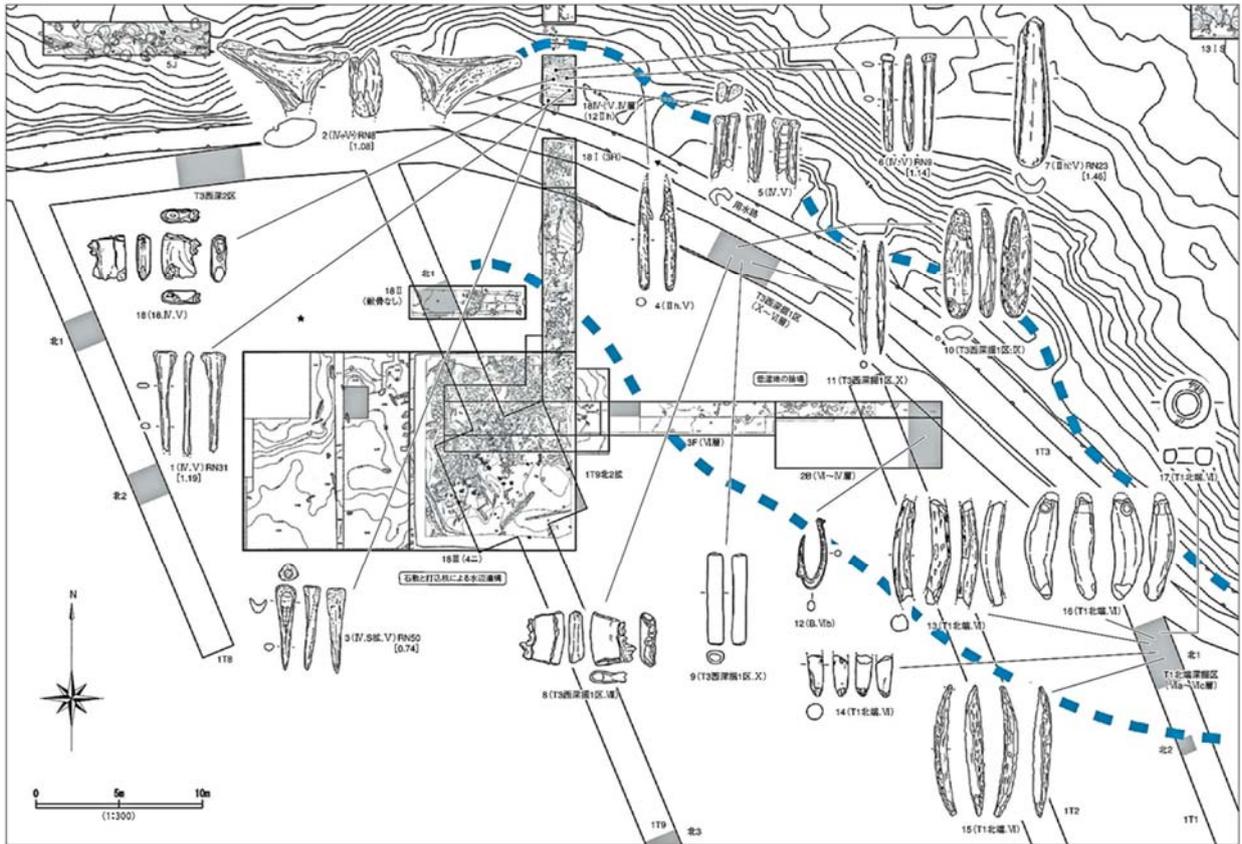


図47 小山崎遺跡の後期の骨角器出土地

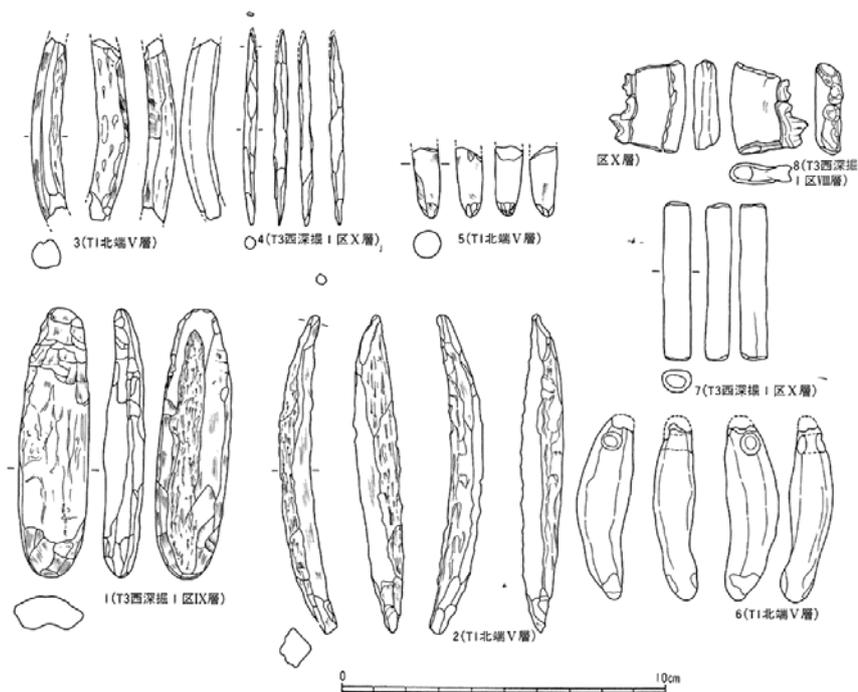


図48 1次調査の骨角器

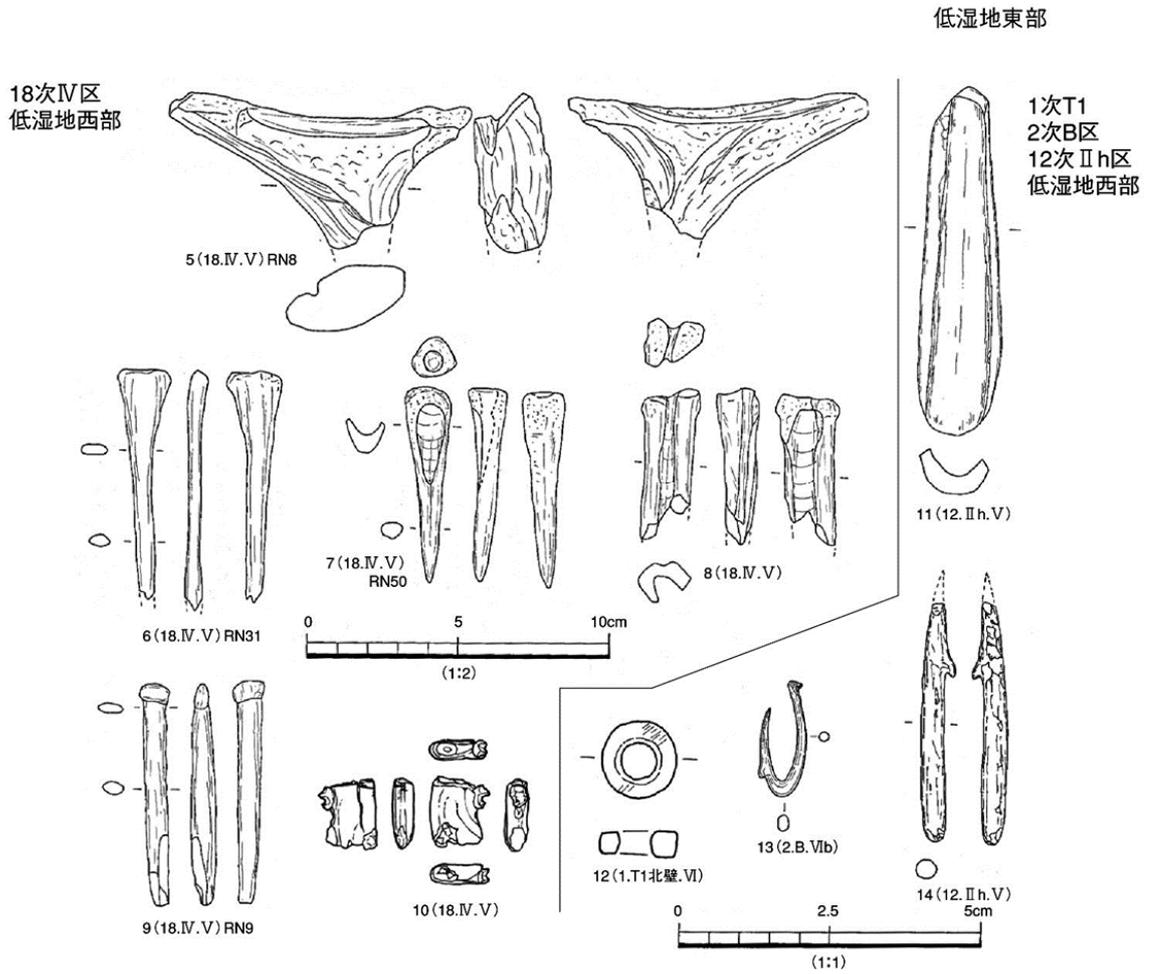


図49 2次調査以降の骨角器

### 人骨

縄文時代後期の捨て場やその周辺からは、人骨が複数点確認されている。

18次I区（3次H区）で出土した椎骨は、白く変色し亀裂が入っていることから焼骨であることが判明した。

加えて、この後期人骨のうち3点について、炭素窒素同位体分析を行った。その結果、前期人骨よりも陸上資源に近い食性の特徴を示していた。

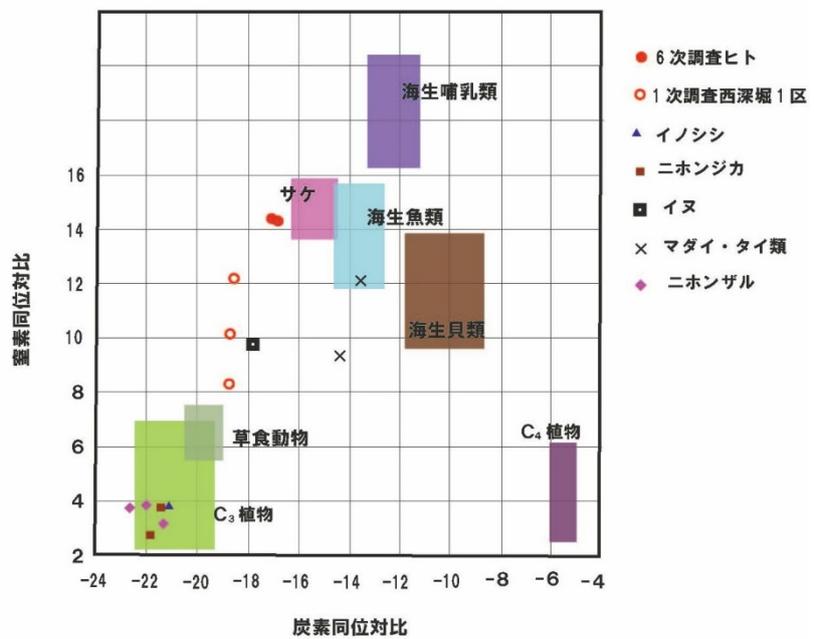


図50 人骨・動物骨の炭素・窒素同位体比と推定されるタンパク源の比較

### 動物遺体

動物遺体は、主に捨て場で出土したが、水辺遺構でも若干数が出土した。

同定できた資料のうち、約77%がニホンジカ、イノシシで占められ、ほかの遺跡と比較してもこの2種に特化した組成を示している。また、両種の出土部位から、遺跡内に全身を持ち込み解体・利用していたと考えられる。

また、イヌ骨の炭素窒素同位体分析では、人骨と近い同位体比であった

### 小山崎遺跡の狩猟の獲物

後期前葉から中葉を中心とする時期の動物遺存体が13,839点

この内、後期のものはイノシシが588点、ニホンジカ1,250点とこの二種で約77%を占めている。他にツキノワグマ、タヌキ、イヌ、ニホンアシカなどの哺乳類やアホウドリ科、う科、カモ類、ワシ類などの鳥類がある。

小山崎遺跡のイノシシ・シカは図52に示すように現生のものより大型である。

捨て場は主要な残滓を捨てる場所。水辺は動物を利用する場所

小山崎遺跡後期低地捨て場の動物遺体

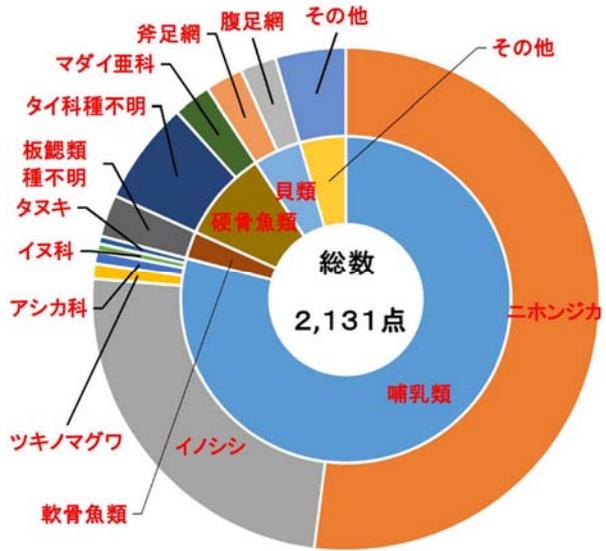
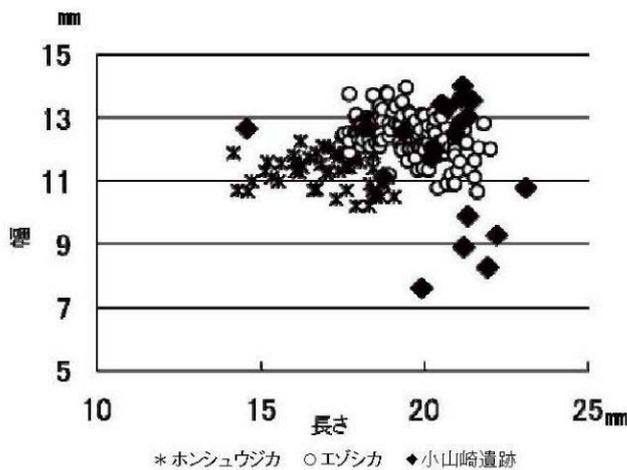
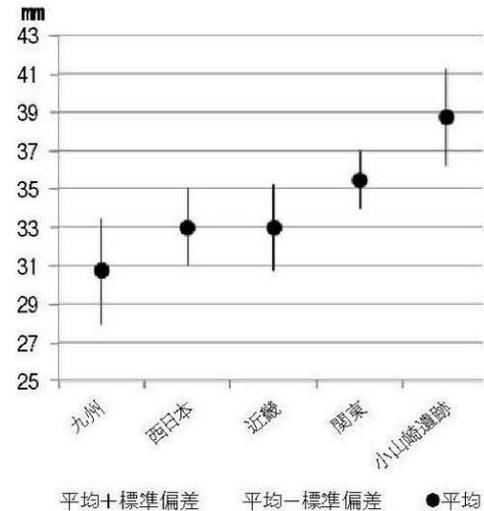


図51 小山崎遺跡後期低地捨て場の動物遺体



出土イノシシの下顎M3の大きさと現生種との比較



出土ニホンジカの下顎M2の大きさと現生種との比較

図52 小山崎遺跡のシカ・イノシシの大きさ

イノシシ	廃棄場	水場	12h・18IV	18 I
頭	122	0	69	0
歯	242	52	54	50
体幹	26	0	6	0
主要四肢骨	81	1	33	0
四肢骨末端部	46	4	31	3

ニホンジカ	廃棄場	水場	12h・18IV	18 I
角	48	8	2	8
頭	137	3	23	3
歯	390	84	26	82
体幹	79	0	21	0
主要四肢骨	299	16	35	10
四肢骨末端部	156	17	29	16

出土遺構ごとにみたニホンジカ・イノシシの部位別出土量  
 ※破片点数を基に集計。体幹は椎骨、肋骨、主要四肢骨は肩甲骨、上腕骨、尺骨、橈骨、寛骨、大腿骨、脛骨、踵骨、距骨、四肢末端部は手根骨、中手骨、足根骨、中足骨、基節骨、中節骨、末節骨を集計

図53 出土地毎に見た部位別出土量

他の遺跡と比較すると、小山崎遺跡の動物はイノシシ・シカの割合が突出する。

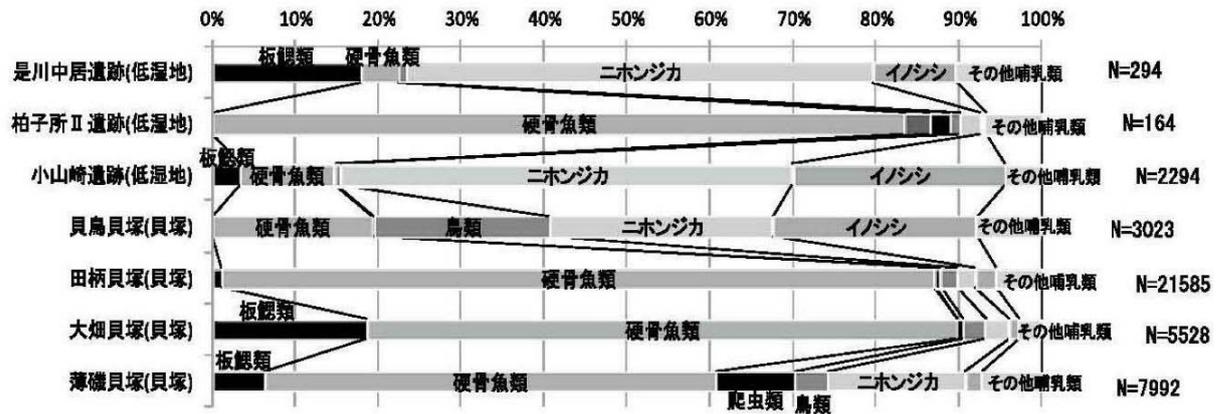


図54 他の遺跡との動物遺存体組成の比較

### 小山崎遺跡の漁撈

箕輪サケ孵化場で現在も使われている「サケ敲击棒」と酷似する棍棒状木製品が出土している。

鹿角製の釣針、や有溝土錘・石錘、切目石錐の魚網の錘とみられるものが出土している。前期の礫石錘に比べ軽く、恐らくは投網用であろう

魚骨にはマダイ、クロダイ、スズキ、ヒラメ、サバ、ホウボウ、ボラ、サケなどが出土している。はマダイ、はスズキ、はサケの椎骨と歯骨である。



103



103は棍棒状の木製品で、「サケ敲击棒」と考えられます。遺跡に隣接する箕輪サケ孵化場では、現在もこの棍棒状木製品に酷似したサケ敲击棒が使用されています。縄文時代後期にここで暮らしていた人々も、サケ漁に依存していた可能性は高いと考えられます。

▲棍棒状木製品 (103) 出土状況

番号	資料名 (樹種)	寸法	出土遺跡 (時代)
103	棍棒状木製品	長さ 11.1cm : 幅 2.7cm	小山崎遺跡 (縄文後期前葉～中葉)

図55 サケ敲击棒 (?) と出土状況



小山崎遺跡では、この他に漁撈に関するものとして、釣針や錘などが見つかっています。104は鹿角製の釣針で、105は有溝土錘、106は切目石錘です。105・106はいずれも錘としては軽量で、投網用の錘と推察されます。

番号	資料名(樹種)	寸法	出土遺跡(時代)
104	釣針	長さ1.9cm：幅0.8cm：厚さ0.25cm	小山崎遺跡(縄文後期前葉～中葉)
105	有溝土錘	長さ4.0cm：幅2.6cm：厚さ1.7cm	小山崎遺跡(縄文後期前葉～中葉)
106	切目石錘	長さ4.0cm：幅2.9cm：厚さ2.3cm	小山崎遺跡(縄文後期前葉～中葉)

図56 小山崎遺跡の漁撈具



番号	資料名	寸法	出土遺跡(時代)
107	マダイ前上顎骨左		小山崎遺跡(縄文後期前葉～中葉)
108	マダイ歯骨		小山崎遺跡(縄文後期前葉～中葉)
109	スズキ歯骨右		小山崎遺跡(縄文後期前葉～中葉)
110	スズキ左主軸蓋骨		小山崎遺跡(縄文後期前葉～中葉)
111	サケ類椎骨		
112	サケ科椎骨		
113	サケマス類歯骨		

図57 小山崎遺跡の魚骨

### 小山崎の植物利用

水辺遺構や捨て場から、オニグルミ・クリ・トチノミなどの利用痕跡のある種実のほか、栽培・栽培可能性植物のアサやヒエ属、ゴボウ近似種などが確認された。

また、注目すべきものにヤシの実（ココヤシ内果皮）がある。ヤシの実は、年代測定の結果、後期前葉から中葉の範囲を示した。

固い殻部分の破片であるが、縄文時代の容器例や現代アジアでの容器使用例がある。本州旧本海側の海岸には今でも対馬暖流によって運ばれたヤシの実が打ち上げられることがある。

#### ココヤシの容器

珍しい出土品にココヤシを素材とした容器の破片がある。

浜に漂着したものを利用したと考えられる。

飛島では今も漂着するという。



図57 ココヤシ容器の破片

### 栽培植物

アサは中期中葉頃から後期前葉にかけて、ヒエ属は中期中葉から後期中葉まで連続的に出土している。炭化した資料が確認され、縄文人による利用があったと推測される。

また、アサやヒエ属は、水辺遺構周辺において、浅い沢が流れていたと推定されるⅠ区や南側が流水域であったⅢ区など、水域に近い地点で多く出土する。

その要因として、加熱処理後に調理具などを水域で洗浄した可能性も考えられる。



ヒエ類



ヒエ



ゴボウ近似種

図58 後期の栽培植物の種子

### 小山崎遺跡の植物利用の用具と堅果類

後期前葉から中葉の層位で棒の先端を削ぎ落として尖らせた「掘り棒」とみられる棒状の木製品が出土している。長さ15cmあまりが残存している。根菜等の掘り具としての機能が考えられる。

堅果類ではトチ、クルミ、クリがあり出土量も多い。前期ではなかったトチが出現する。



図60 掘り棒(?)



図61 後期の堅果類

#### 小山崎遺跡の縄文時代後・晩期の調査成果の総括

後・晩期の小山崎遺跡の変遷は次のようにまとめられる。

後期初頭（宮戸 I b 式期）には水辺の遺構の背後の台地直下に廃棄場が形成される（東西約50m、南北約10m）。18次IV区、VI（VIII）～IV層や1次T1北端深掘区V（VI）層で豊富な動植物遺存体や骨角器、木製品が伴出する。

18次IV区VI（VIII）層は、この時期までに層形成を終了している。IV区は動植物遺存体を伴う廃棄場だが、砂層は確認できず、古流路は存在しない。ここでの大型植遺存体は少ないが、VI（VIII）層検出のオニグルミの炭化した内果皮の年代測定値は3922±21y BPであり、土器型式との矛盾はない。低湿地西部での包含層は、この時期に一気に南方（水域）に拡大し、水辺遺構構築地点を大きく越え、1次のT8北4区付近まで確認できるが、水辺の遺構（18次III区）より南側は、水域的環境下であり、流れ込みと考えられる。

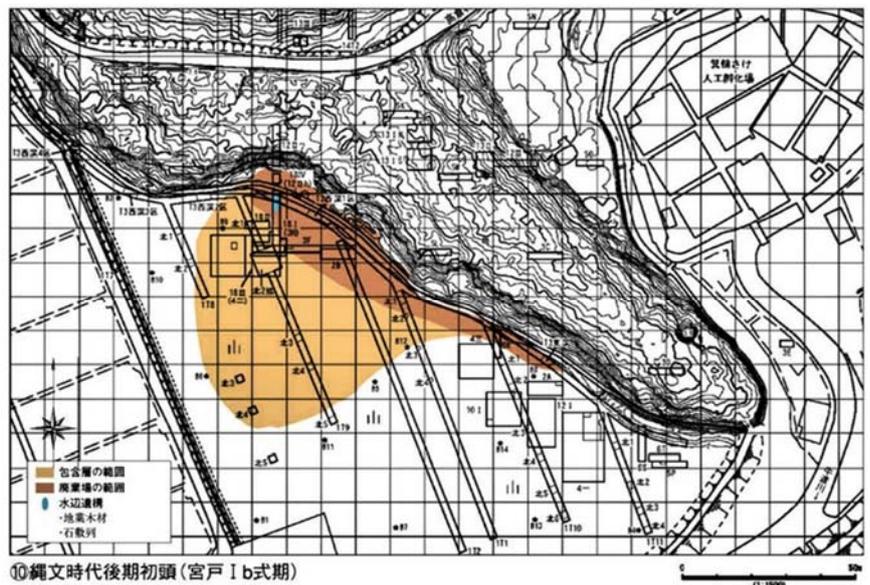


図62 縄文時代後期初頭の低地の活動範囲

後期前葉（堀之内1式併行期）には水辺の遺構地点への本格的な進出と敷石等の遺構構築が開始される。東西130m、南北は最大で80mの包含層の広がりを持つ。

後期中葉に並ぶ低地で最大規模の広がりが確認される時期である。水辺の遺構の背後に位置する浅い沢を利用した東西90m、南北約20mの捨て場の砂を主体とする層（18次I区VI層・3F区VI層）や台地に近いB区V（VIb）層、台地直下の投棄場の18次IV区V層では復元可能な良好な多量の廃棄された土器に加え、豊富な動植物遺存体と骨角器、木製品が共伴する。

18次II区V層では、当該型式の土器が多く組成される。18次I区VI層からは栽培種に近似するヒエ炭化種子が確認されており、周辺でのヒエの栽培が予測される。

1次T1北端深掘北1区VI層では、この時期までに形成を終えた砂主体層（VIa～c）で動植物遺存体、骨角器・木製品、人為的な大型植物遺存体の全てが伴出した。4次一区V（VI）層でも砂層から木製品が出土した。

砂層の堆積が低地で未だ継続しているが、台地寄りの地点（古流路内）では、VI層中での敷石の存在が確認されており、水辺の遺構の構築が台地に近い地点から進んだことが窺える。

一方、後に打込み杭が敷設される地点では、VII層段階での遺構の構築は確認できない。

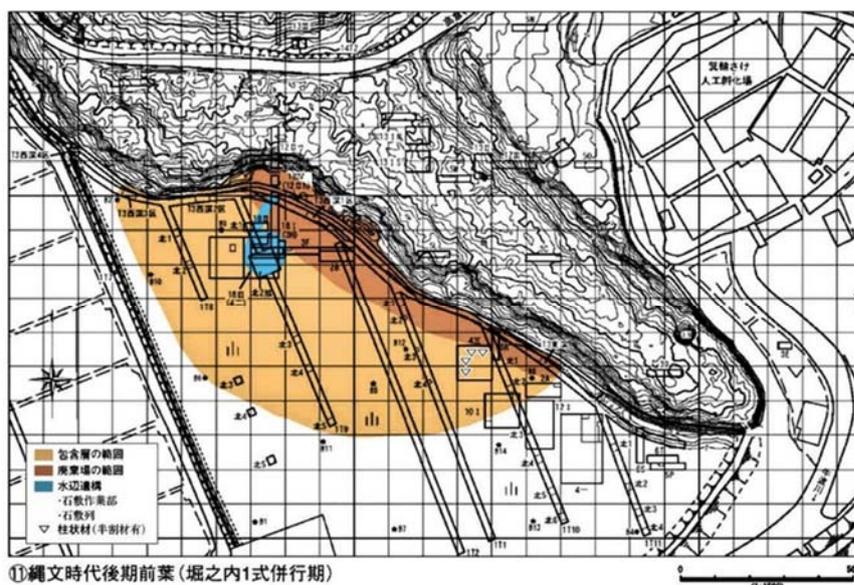


図63 縄文時代後期前葉の低地の活動範囲

後期前葉（堀之内2式併行期：十腰内I式期）には堀之内1式期に比べやや低地東部で範囲が縮小する。引き続き水辺の遺構の構築は続き、背後の動植物遺存体や骨角器、木製品を含む廃棄場の利用も盛んで、1次T3西深掘1区では深い層準のIX～VI層の砂質土からは動植物遺存体、骨角器、木製品などが全て共伴する状況が確認できる。

水辺の遺構の杭列はまだ見られないが、流路内のVII、□層の砂層からは、人為的な利用を示すクルミやトチノキが流れ込んで堆積していることから、東方に、それらの利用地点があったと考えられる。また栽培種のアサや、栽培の可能性のあるヒエ属もこの砂層から検出される。

浅い谷を利用した廃棄場の利用と水辺の遺構中央部の砂（VII）層の堆積は、堀之内1式併行期と同様であるが、18次IV区の廃棄場の利用はなされない。

この時期の廃棄場の主要な地点は、T3西深掘1区IX～VI層（砂層を介するVII層上部で標高約1.0m）や2次B区（VI層）付近の浅い沢であり、この古流路を利用した廃棄場は、水辺遺構北側の1

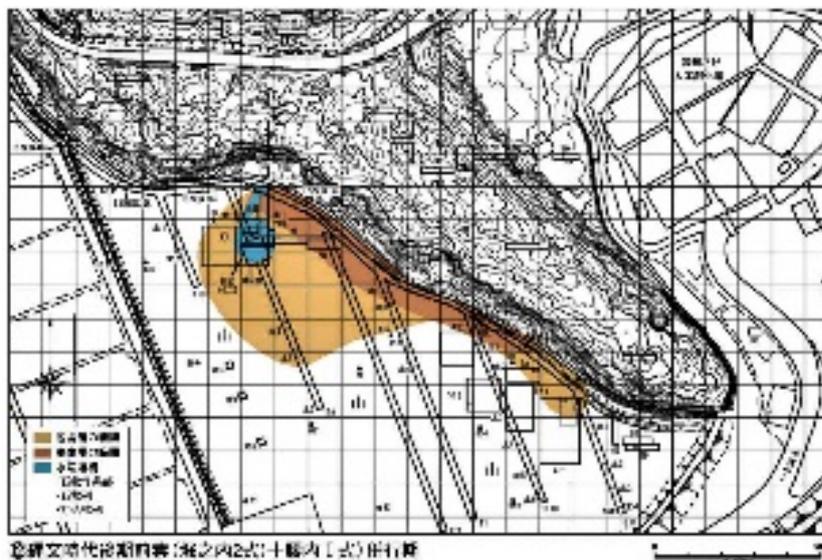


図64 縄文時代後期前葉後半の低地の活動範囲 1

8次I区中央部を横切って流下する。

このⅦ、□層に代表される砂層は、水辺の遺構敷石作業場付近では確認できないことから、水辺遺構を避ける形で、北側を西に向かうと見られる。



図65 縄文時代後期前葉の斜面部・舌状台地・低地の活動範囲

後期中葉（加曾利B1～B3式併行期）には東西約150m、南北最大50mの規模で包含層が形成され、後期前葉の堀之内1式期と並ぶ低地最大規模で包含層が形成される時期にあたる。

水辺の遺構一帯の未分解腐植層のⅤ層に敷石と打込み杭が敷設され、遺構がほぼ完成した姿を現した時期である。

水辺の遺構本体や浅い沢地形を利用した捨場からは木製品始め、漆器、完形に復元可能な資料が多く出土し、注口土器や土偶等の祭祀的色彩の濃い遺物も多い。なお、2次A区

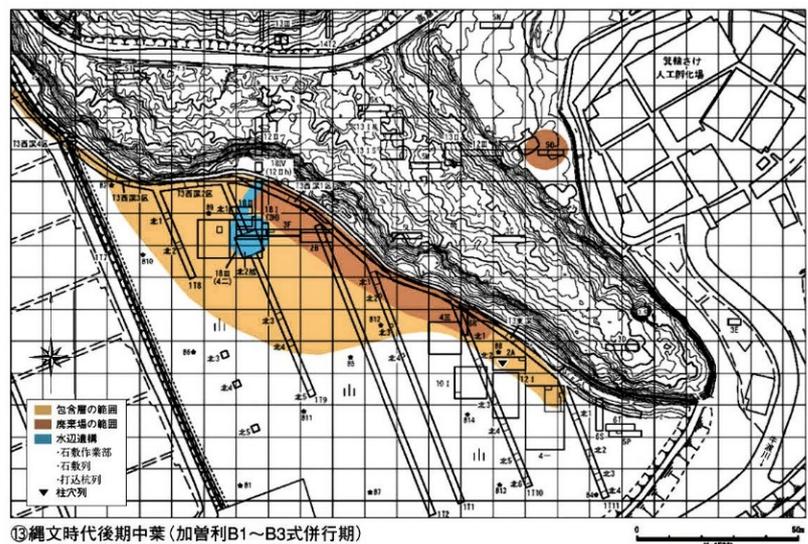


図66 縄文時代後期中葉の低地の活動範囲

Ⅲ(Ⅳ)層で概要報告(阿部1999)された柱穴群(平地式建物)は、プラン確認に留まり、4次三区の材を伴うピット(渋谷・竹田2001)も確実な建物遺構としての証明はできていない。

後期中葉期の確実な遺構は、最も設備が整った水辺の遺構と、廃棄場の2つである。多数の木製品や大型植物遺存体を包含する未分解腐植層(Ⅴ層)が堆積する環境が水辺の遺構付近に限定され、水辺の遺構の東側の2次B区以東では確認できない。

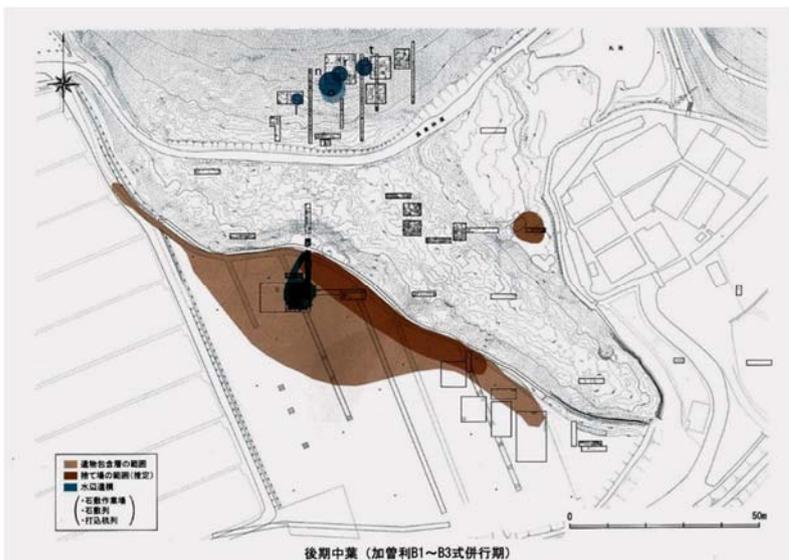


図67 縄文時代後期中葉の斜面部・舌状台地・低地の活動範囲

常に水漬けの状態を示す未分解腐植層（泥炭層）が広がる環境下に、水辺遺構は成立していた。花粉分析でも、周辺は、河道周辺の湿った場所の植生を反映している。加えて、水辺遺構の背後を、沢を利用した廃棄場が東西に横切る。

後期後葉（新地式期）には後期中葉に比べ、台地寄りに包含層の南北幅が縮小する。良好な土器の出土地点は引き続き水辺遺構一帯であり、分解の進む粘土層の堆積が始まる衰退期に入っても、水辺遺構本体の北を横切る廃棄場（18次I区IV・III層）や敷石通路の周囲や直上（18次II区IV層）からは注口土器や土偶、土版など祭祀、儀礼的色彩の強い遺物が多く出土し、埋没過程にある水辺遺構で何等かの祭祀的な行為が実施された可能性が高い。

低湿地東部の4次三区、6次R区付近にも廃棄場が形成された。

未分解腐植層の直上に、分解の進んだ腐植質粘土層があるのは、一時的離水など乾燥化した可能性がある。

水辺の遺構中枢部は、敷石や打込み杭構築地点に粘土層が堆積し、機能を失っていくが、敷石と貼り粘土による道路状遺構は、周囲から一段高く、目立つ形で機能を維持し、周囲に遺物が集中する。

また、古流路を利用した廃棄場も、粘土の堆積が始まるものの、埋まり切らずに利用が継続された。

晩期前葉（大洞B式期）には水辺の遺構付近では、18次I区の0～2区III・II層や18次II区IV b、IV a層等で完形に近い土器の出土が目立つ。

埋没が進む水辺遺構で、打込み杭列が、どの程度地上に表われていたかは不明であるが、北へ伸びる道路状遺構部は土手状の高まりで機能が維持され、その周囲から注口土器や台付小鉢等の土器が出土する。

捨て場は18次I区中央部で残存するが、広がりはない。同層準では、動物遺存体は微細、もしくは少量の焼骨であるが、大型植物遺存体や、木製品が共伴する。

一方、低地東部にも、東西30m、南北約12m程度の包含層が、4次三区～12次I区まで広がる。

この時期までに層形成を終えた4次三区IV層では、遺物は水際で堆積したような小片が多く、接合は

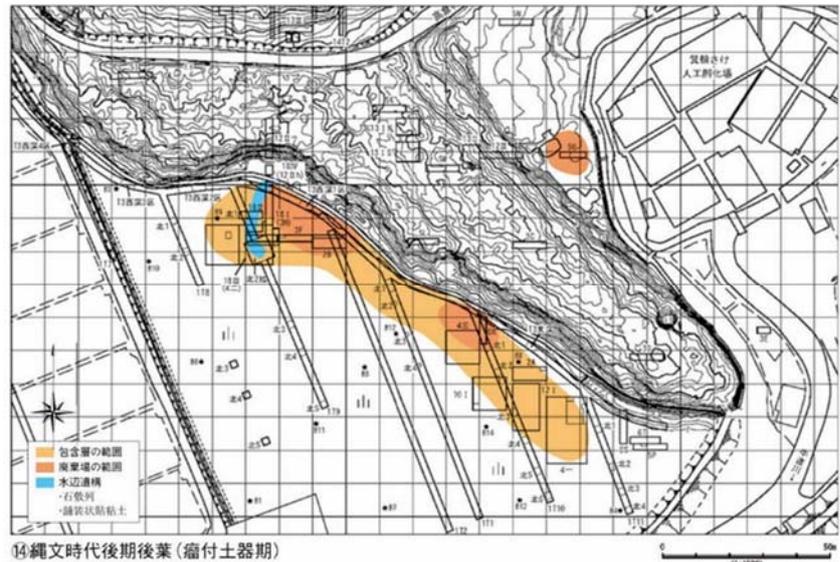


図68 縄文時代後期後葉の低地の活動範囲



図69 縄文時代後期後葉の斜面部・舌状台地・低地の活動範囲

しない。

その密度は、台地に近い北側が濃密な分布を示している。同様な状況は12次I区V(□b)層でも確認された。よって、低湿地東部の包含層は一次的な状態ではなく、陸地寄りの地点からの流れ込みと考えられ、縄文人の活動が把握できるのは水辺の遺構地点における直径 約20m程度の狭い範囲に限られる。18次I区中央部には、未だ埋まりきらない浅い沢地形を利用した廃棄場も残っていた。

晩期前葉(大洞BC式期)には分布範囲は、水辺遺構周囲から、東は1次T1北端部まで東西約50m、南北20mの範囲に限定される。

一方、低湿地東部の利用はない。水辺遺構の本体よりも、北へ伸びる敷石部と付近の廃棄場で精巧な注口土器や土偶・土製品が見られ、浅い沢地形を利用した捨て場や、敷石と貼粘土の道路状遺構が継続して機能していたことが窺える。

18次I区~1次T1北1区までの浅い沢地形を利用した捨て場が継続利用され、水辺遺

構は、道路状遺構が、周囲の低地(分解の進んだ腐植質粘土層)から浮かぶ時々乾く湿地という形で維持されていたと考えられる。

晩期中葉(大洞C1式期)には包含層の分布範囲が晩期前葉より縮小し、大洞BC期期と同様、水辺の遺構付近のみに、直径約20m程度の範囲で示される。良好な土器は18次II区の北へ伸びる敷石列付近でしか確認

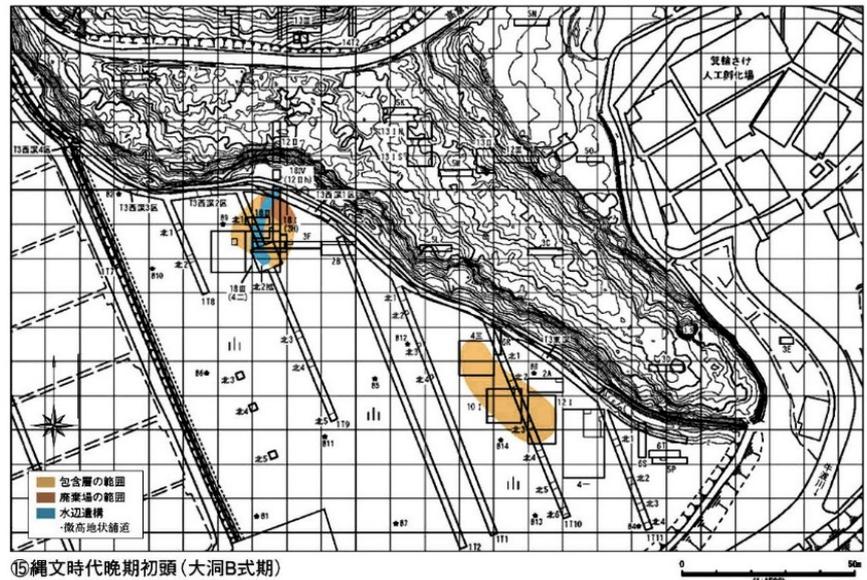


図70 縄文時代晩期初頭の低地の活動範囲

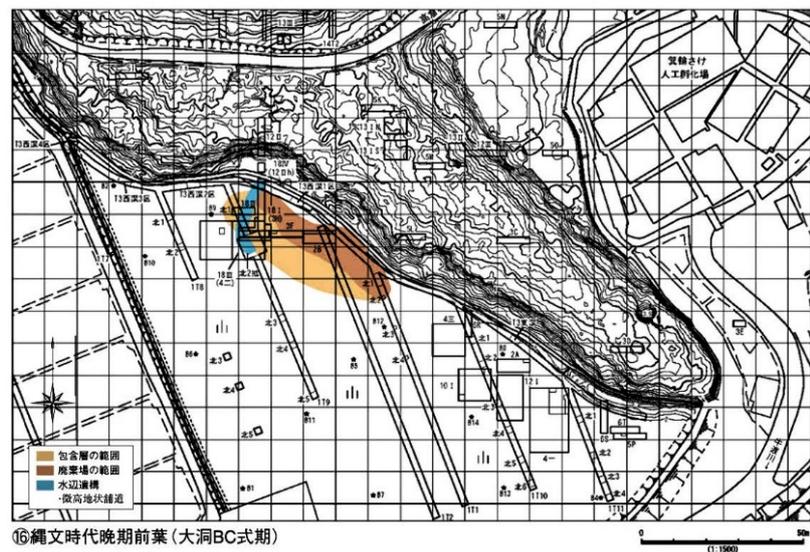


図71 縄文時代晩期前葉の低地の活動範囲

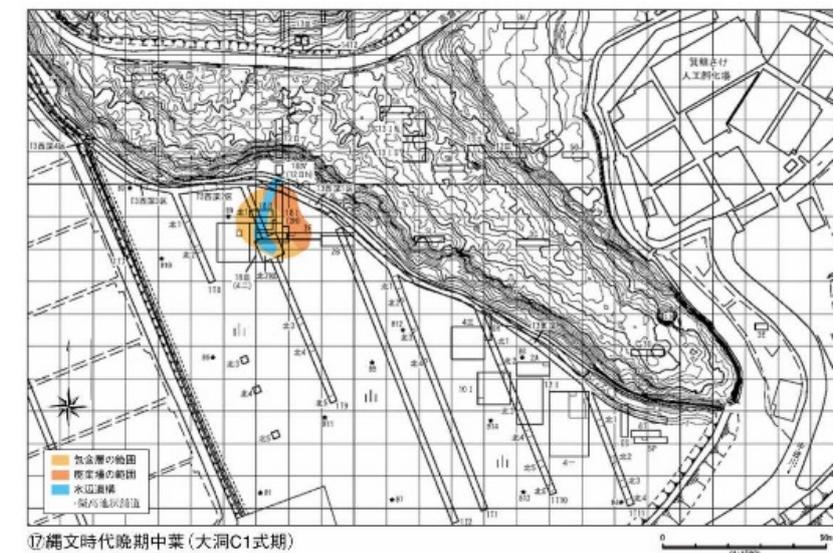


図72 縄文時代晩期前葉の低地の活動範囲

できないが、小山崎遺跡の最終の場所が、水辺の遺構地点であった。

水辺の遺構付近のIVb～IVa層は縄文時代の遺物包含層として最後の層準であるが、この段階に至っても、水辺の遺構の道路状遺構のある範囲は、周辺の未分解腐植を含む粘土層（IVa）が広がる中、わずかな高まりが認められる「微高地状の道路状遺構」と表現可能な形で存続していた。

### （9）後・晩期の神矢田遺跡

所在地は飽海郡遊佐町大字当山字北目である。ほ場整備事業の施工前の昭和45年5月2日～5月5日、昭和45年8月6日～8月12日、昭和46年5月2日～5月5日、昭和46年8月5日～8月11日、昭和46年10月30日～11月3日の5次にわたり発掘調査が行われた。

発掘調査では3棟の住居跡や、石組遺構が検出された。

発掘された土器は1・2次調査で完形品3個体、破片約15,000点、3～5次調査では完形品20点破片は約23,000点に及んだ。縄文時代中期末より晩期末にいたる各時期の土器と弥生時代にかかる土器も出土した。土器の特徴に従って分類され、中期末葉の第1群土器から晩期末葉の第16群土器に細分された。

第1群土器は中期末葉の曲続的なタテのモチーフをもつ磨消縄文を有する土器で、口縁が外反し、ゆるくくびれる胴長の器形となる大木10式の仲間である。

第2群土器は資料的に乏しく断片的となるが、貼付隆線文による磨消縄文の区画稜線がみられ、垂下する部分にはタテに刻みを加付するものもある。宮戸Ia・b式、袖窪式門前貝塚第二類、称名寺にの関連を持つ資料である。

第3群土器は量的にも内容的にも豊富である。深鉢・鉢では口縁がゆるやかに波をうつものが多く口

縁は外反して開き、口唇が内曲する。壺や甕のような器形も多くなる。渦巻文や同心円文は独特のもので、関東の堀之内1式、南境式などに関連する。

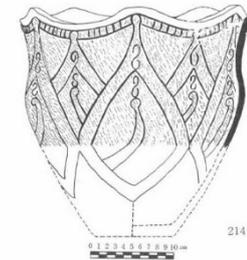


図73 堀之内1式土器

第4群土器の深鉢、鉢形は、第3群土器と殆んど変わらないが、

口縁がさらに開く傾向をもち、波状口縁の波頂部が舌状に張り出す。トツタリ形の壺など東北北部の十腰内1式、堀之内2式に併行する。

第5群土器は、深鉢、鉢、浅鉢、口縁が大きく開く深鉢があり、南東の加曾利B1式の色彩の濃い土器群で、北陸北半の三仏生式、宮城県の宮戸IIa式・東北北部の十腰内2式土器に併行する土器である。

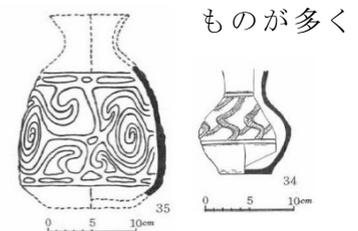


図74 堀之内2式土器

第6群土器は東北南部宮城県地方で宝ヶ峰式あるいは宮戸IIb式と呼ばれた仲間であり、東北北部青森県地方では十腰内III式と呼ばれる土器の仲間である。関東の加曾利B2、B3式に併行する。

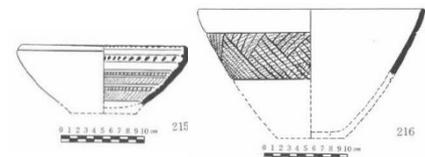


図75 加曾利B2式土器

第7群土器はいわゆる新地式と呼ばれる土器で、瘤付土器第I段階にあたる。宮城県の西ノ浜式とも共通する土器である。

第8群土器は瘤付土器第II段階に相当し、宮戸IIIa式、関東の安行1式に併行する。

第9群土器は瘤付土器第III段階に相当する。

第10群土器は瘤付土器第IV段階第段階に相当し、宮戸IIIb式に併行するものとみられる。東北北部では十腰内V式に併行する。

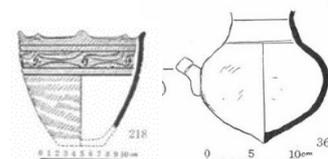


図76 瘤付土器IV段階

第11群土器は玉抱き三叉・三叉状陰刻・魚眼状文などの文様をもつ大洞B式に相当する。

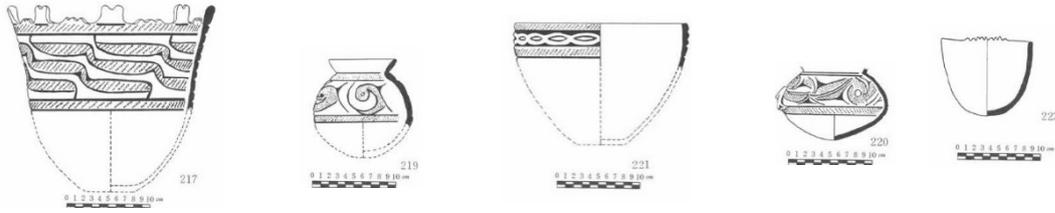


図77 大洞B式土器

第12群土器は)いわゆる羊歯状文を有する土器を中心とする土器群で、大洞BC式に相当する。

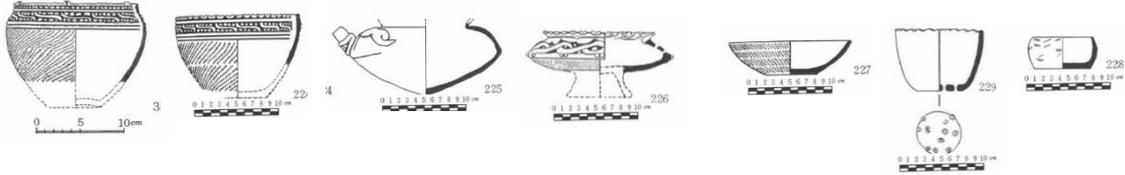


図78 大洞BC式土器

第13群土器はx字状文・大腿骨文などを有する土器を中心とする土器群で、大洞C1式に相当するものである。



図79 大洞C1式土器

第14群土器は平行沈線文を有する土器群で、大洞C2式に相当する。

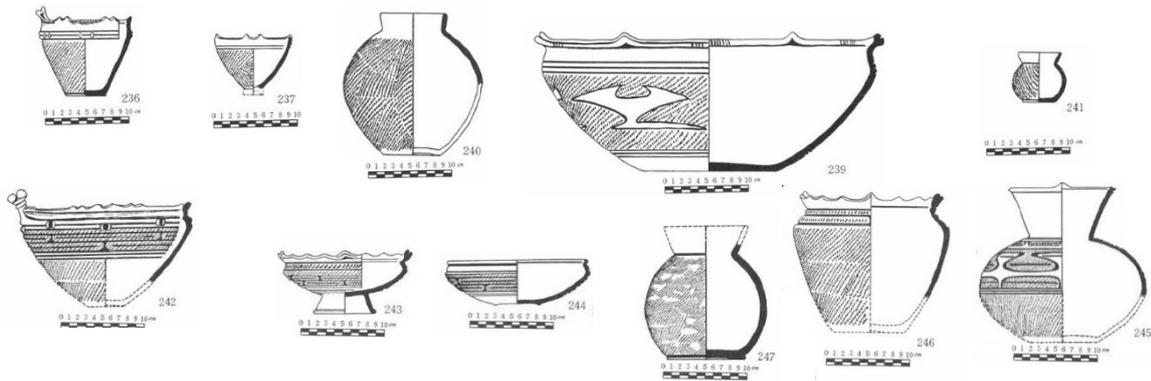


図80 大洞C2式土器

第15群土器は工字文を有する土器群であり、大洞A式に相当する。



図81 大洞A式土器

第16群土器は変形工字文を有する土器群であり、大洞A'式に相当する。

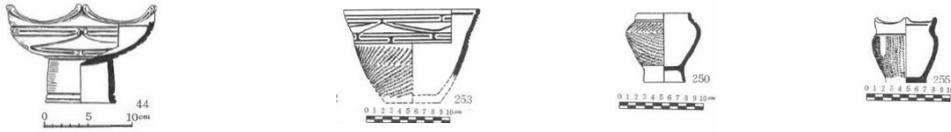


図82 大洞A'式土器

(10) 後・晩期の杉沢C遺跡

杉沢C遺跡で縄文時代後期の土器が出土しているが、調査区内で得られた土器の多くは粗製土器であった。Ⅲ群土器は後期初頭の土器、Ⅳ群土器は後期前葉の土器でⅣA1類は十腰内1式に併行する土器で3本沈線で文様が描かれるA1類と4本以上の沈線で文様が描かれるA2類がある。B類は縄文のみの土器である。

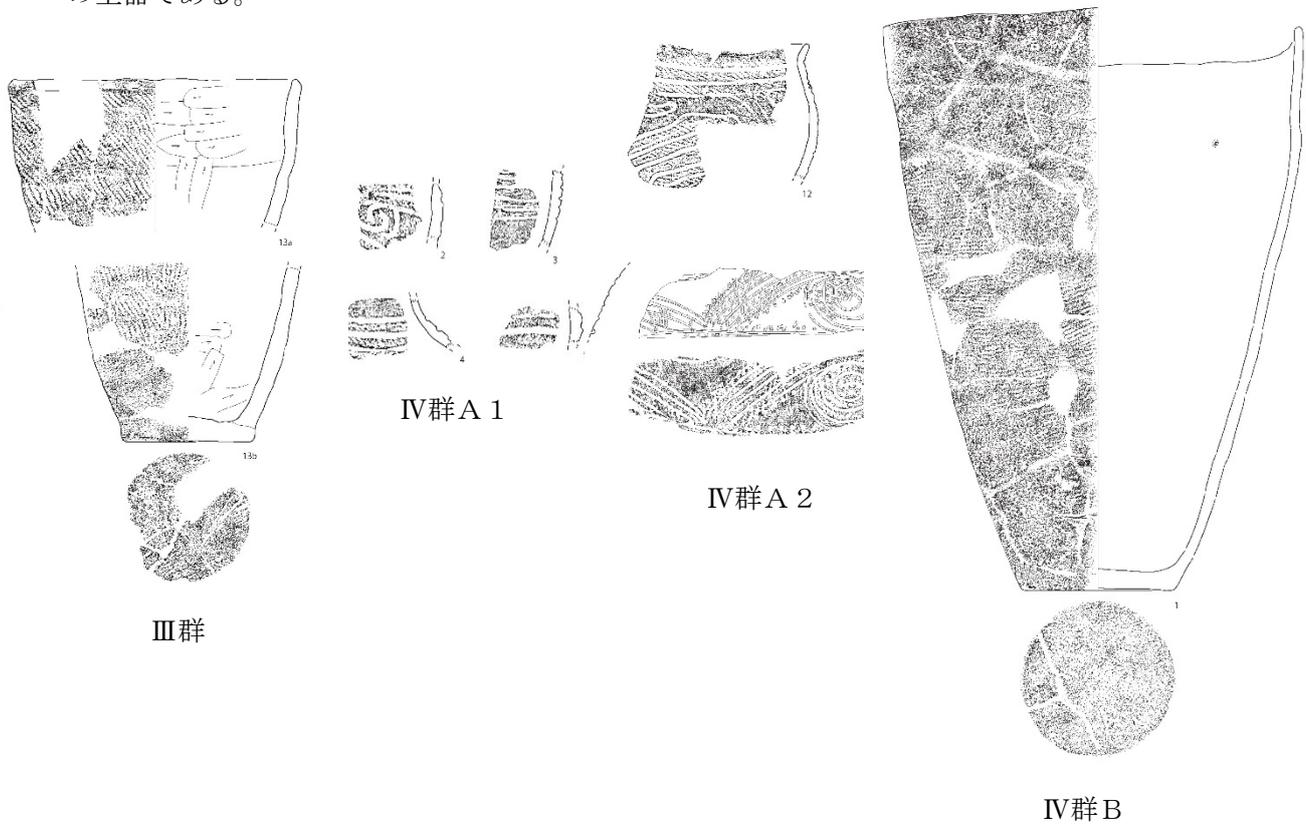


図83 Ⅲ群・Ⅳ群土器

V群土器は後期中葉に位置づけられる縄文のみが施文される土器や無文の土器である。VI群土器は後期後葉の金剛寺1式、瘤付土器第Ⅱ段階を中心とする土器である。

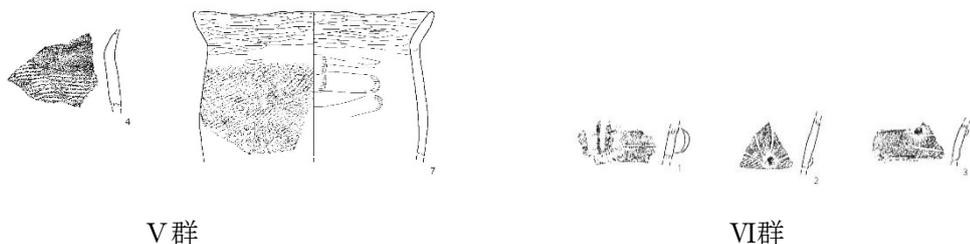


図84 V群・VI群土器

杉沢C遺跡で最も多く出土した土器は晩期に属する。Ⅶ群土器は晩期前葉の土器で、晩期大洞B式、BC式に該当するが、出土量は少ない。大洞B式・BC式に位置づけられるものをA類、B～BC式頃になると思われるものがB類とされた。



Ⅶ群A

Ⅶ群B

図85 Ⅶ群A・Ⅶ群B土器

Ⅷ群土器は晩期前葉から中葉頃に位置づけられ縄文のみが施文されるが深鉢である。当該期の有文の土器はほとんどなく、口縁部が短く外折した器形が主流で大洞C2式以降のものとされている。

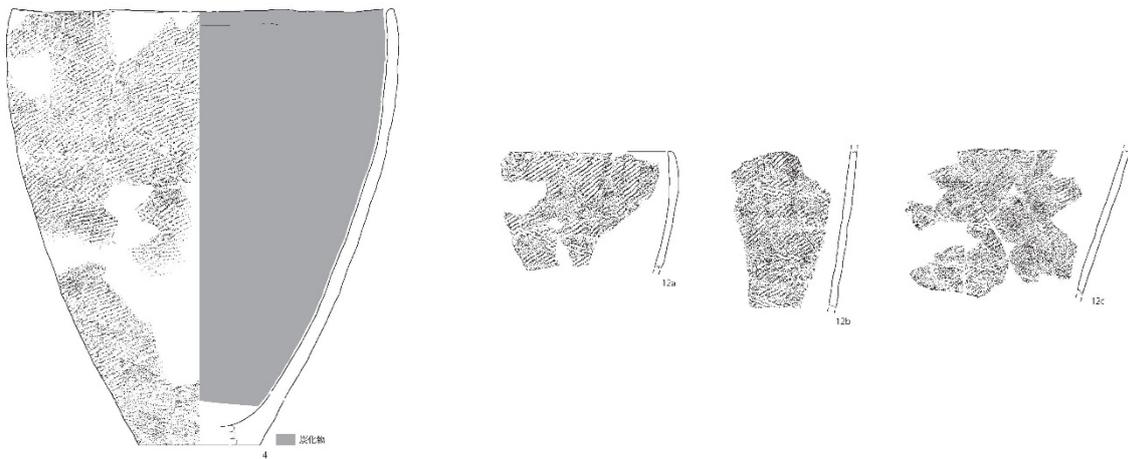


図86 Ⅷ群土器

Ⅸ群土器は晩期後葉の大洞A式土器で出土量も多い。平行沈線が1～5条のA1と6条以上のA2、沈線がなく、外反する口縁部が無文で体部以下に縄文が施されるB1、無文部のないB2に分けられた。

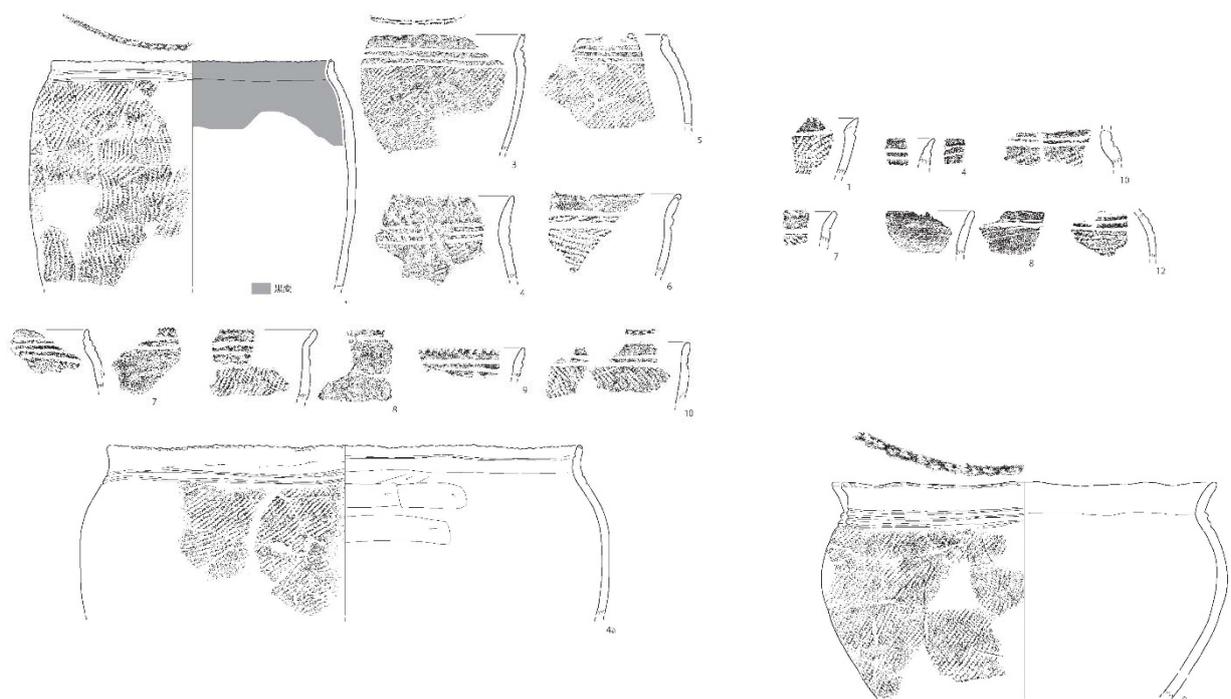


図87 Ⅸ群A1土器

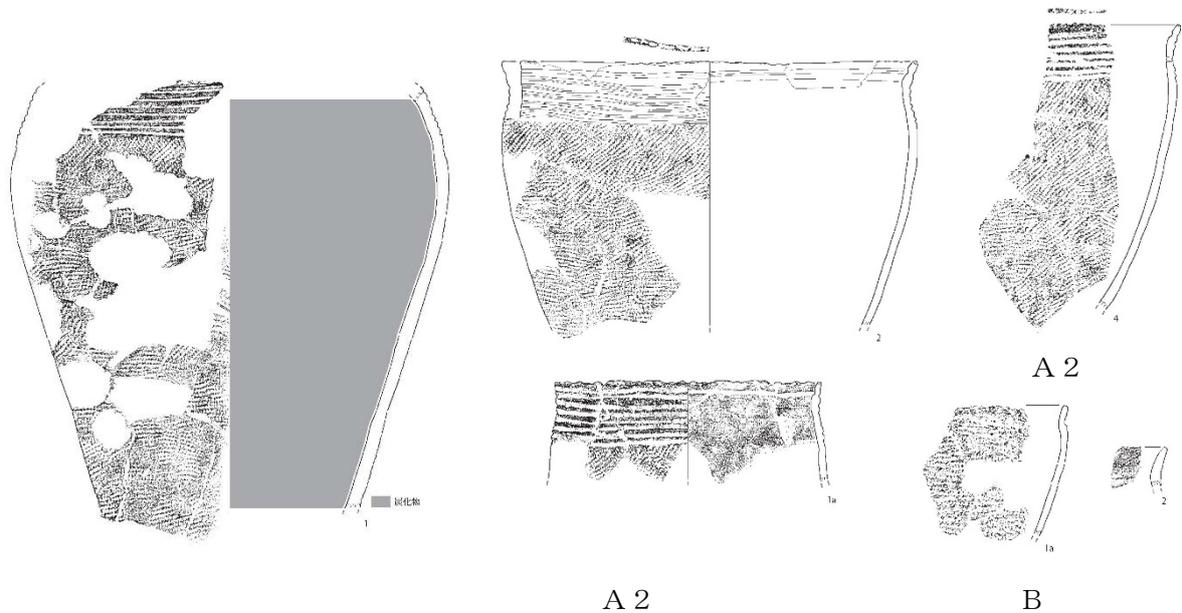


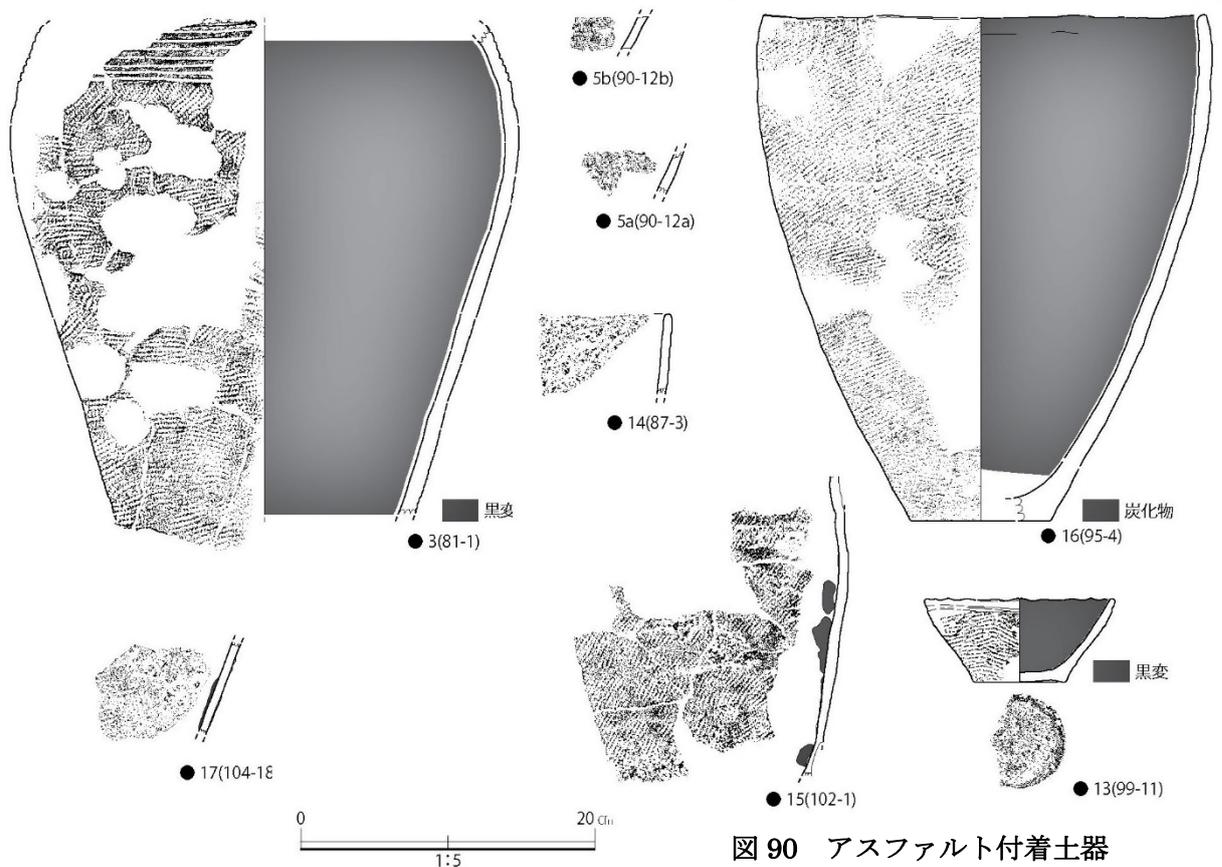
図88 IX群A 2土器・B土器

X群土器は晩期末葉の大洞A'式の土器片が1点だけ出土している。



図89 X群土器

杉沢C遺跡内ではアスファルト付着土器が出土し、その所属時期は14C年代測定結果も加味されて後期後葉から晩期末葉までとされた。遺跡内に天然アスファルトが持ち込まれて精製作業が行われていたとされている。



## (11) 金俣 I・K遺跡

所在地は山形県飽海郡遊佐町大字吉出字金俣であり、国営農地開発事業に伴い、県教委が発掘調査を実施した。調査期間は平成4年5月18日～6月26日までの延30日間で両遺跡を合わせて1,100㎡の調査を行った。

金俣I遺跡では、土壌2基の他、炉跡が検出され、遺物の集中域も検出された。住居跡等は未検出での集落跡とは捉えられなかった。

土器は縄文時代後期加曾利B式期併行のものが主体をなすが、復元できる土器はなかった。石器は、磨石など植物質食料の加工に使用されたものが多く、打製石器の出土率は低い。

従って、本遺跡は山間部の植物質食料を採取・加工するための出づくり的な性格を持っている遺跡と考えることができる。恐らく特定の作業を目的とした短期間のキャンプサイトであったと推定される。

金俣K遺跡では調査区内での遺構・遺物の出土はなく、事業区外へ延びていると考えられた。



図91 金俣 I、K遺跡位置図

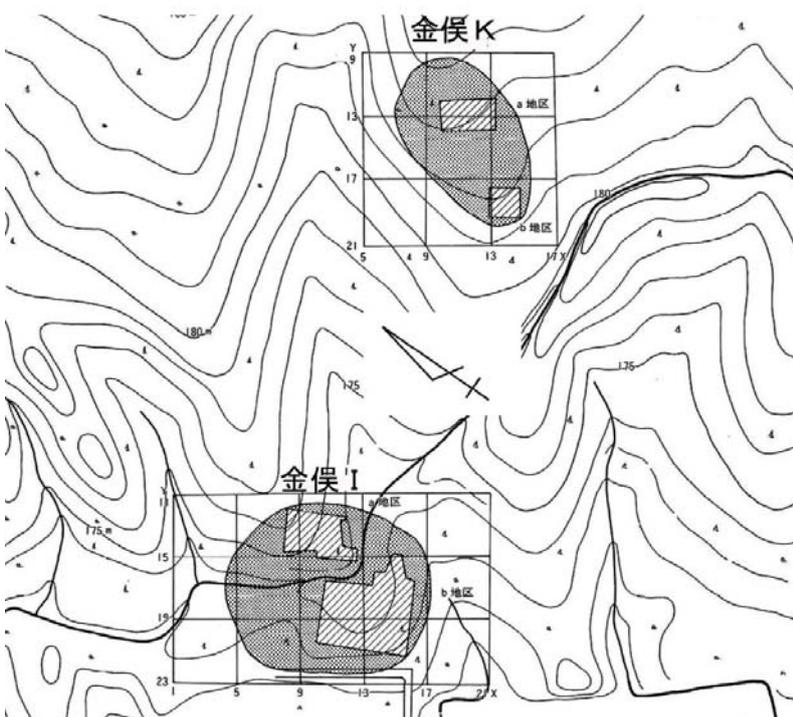


図92 金俣 I・K遺跡の調査区

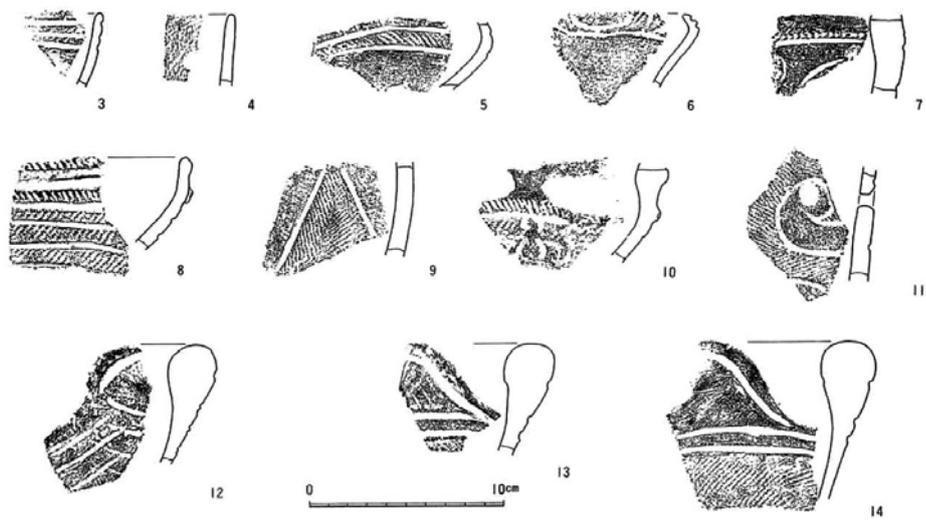


图93 金俣 I 遺跡出土土器

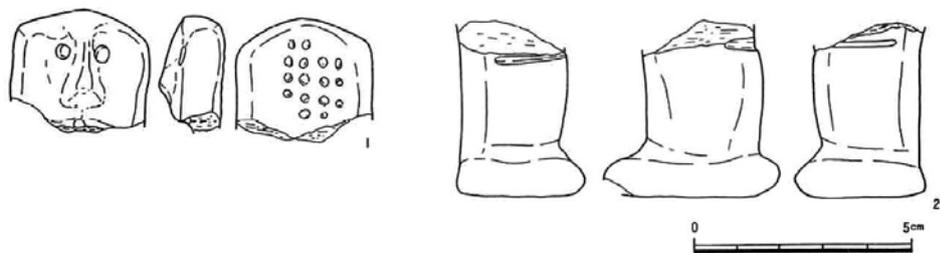


图94 金俣 I 遺跡出土土偶

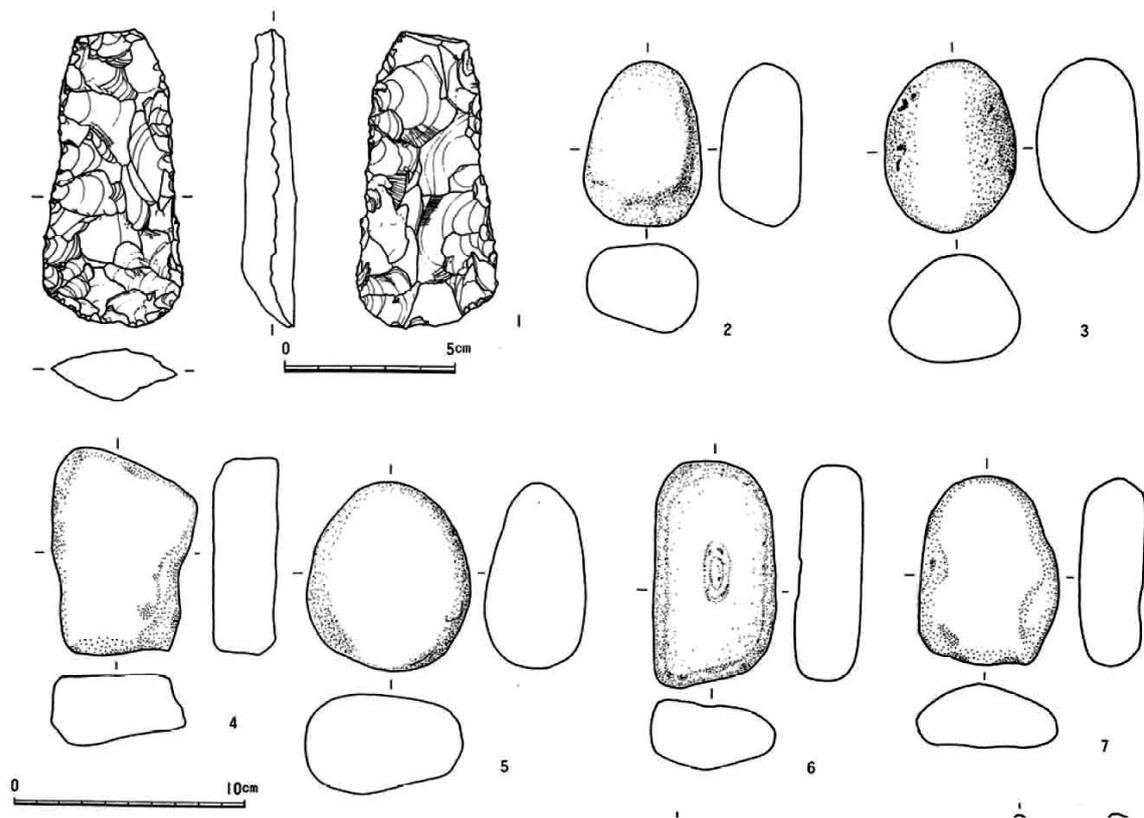


图95 金俣 I 遺跡出土石器 (1)

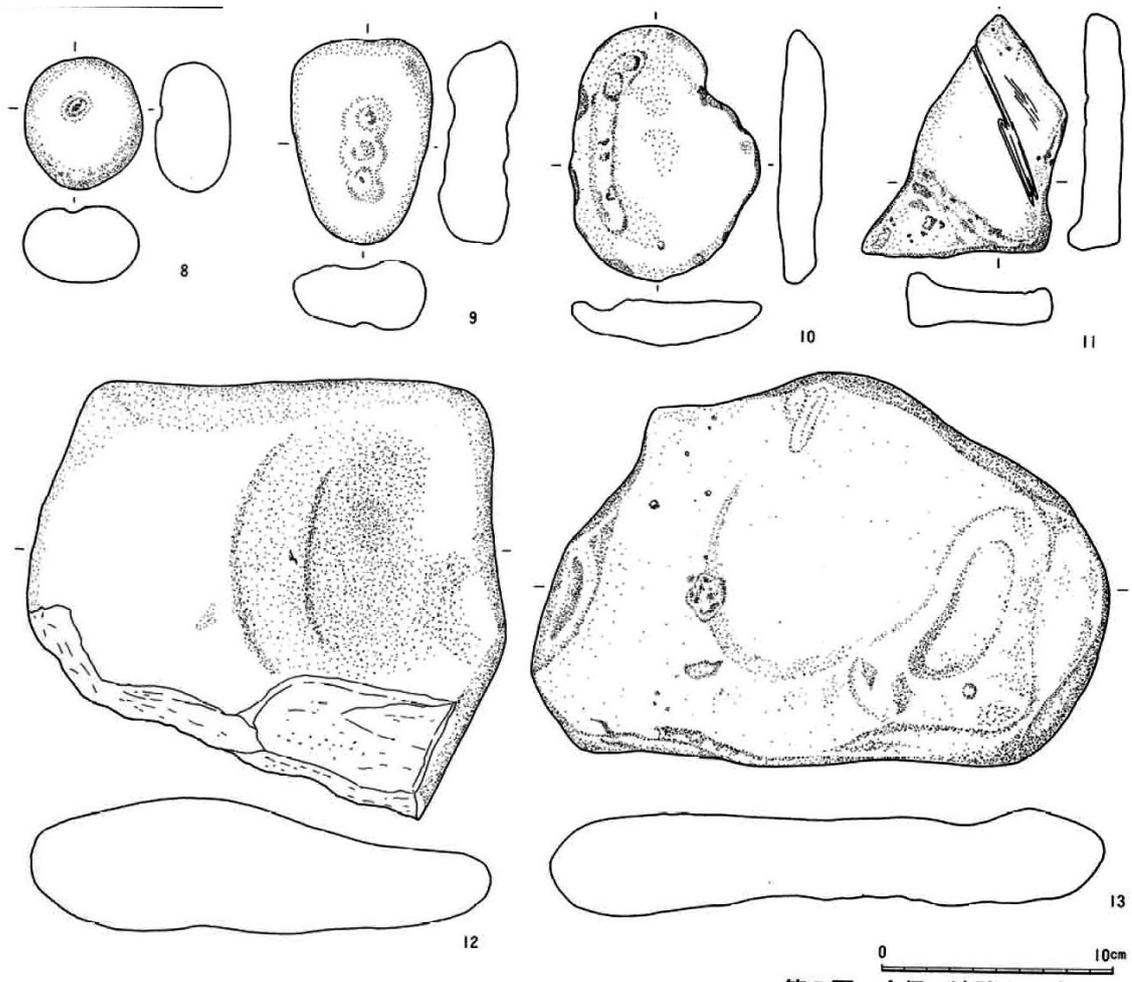


図96 金俣 I 遺跡出土石器(2)

(11) 三崎山A遺跡

所在地は飽海郡遊佐町大字女鹿字三崎山であり、昭和31年(1956)年3月29~30日に現地調査が行われた。参加者は柏倉亮吉・皆川信彌・佐藤東一・酒井忠一・佐賀参吉・伊藤安記・村上孝之助・菅原弘、川崎利夫の各氏他である。

調査目的は1954年11月に菅原弘氏が発見した青銅刀の出土地付近を調査し、その渡来年代を探ることとされた。

この踏査では縄文時代中期~晩期の土器や石器が出土する場所が6ヶ所見つかった。

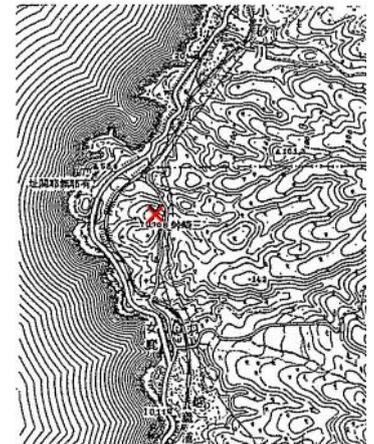


図97 三崎山A遺跡位置図

発見された遺物は縄文土器(中期大木9式、10式、後期加曾利B1式、晩期大洞C1式、A式の土器)

1953年8月に加曾利B1式の完形土器が三崎山で採石を行っていた人によって発見された。左図2地点である。翌1954年11月には地権者の菅原弘氏が鳥海石の採石中、左図1地点で石の隙間から青銅刀を採取した。

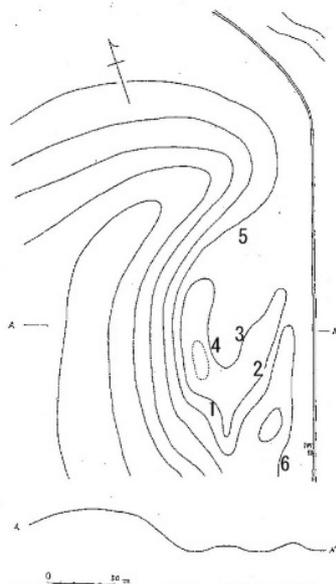


図98 青銅刀出土地と周辺の遺物出土地

1956年3月末の現地調査によって、付近から採取した遺物の検討を行った柏倉亮吉氏により、1956年5月の日本考古学協会第17回総会の

研究発表で付近3ヶ所から採取された加曾利B1式土器に伴うものとされ、中国の殷代に当地にもたらされたものと判断されました。

付近から出土した加曾利B1式の完形土器は、柏倉報告後、長らく所在不明でしたが、近年宮城県の沓澤小波氏の義祖父父重吉氏が收拾した資料にこの土器があることが判明し、遊佐町に寄贈された。

青銅刀は東京国立博物館の所蔵となっている。

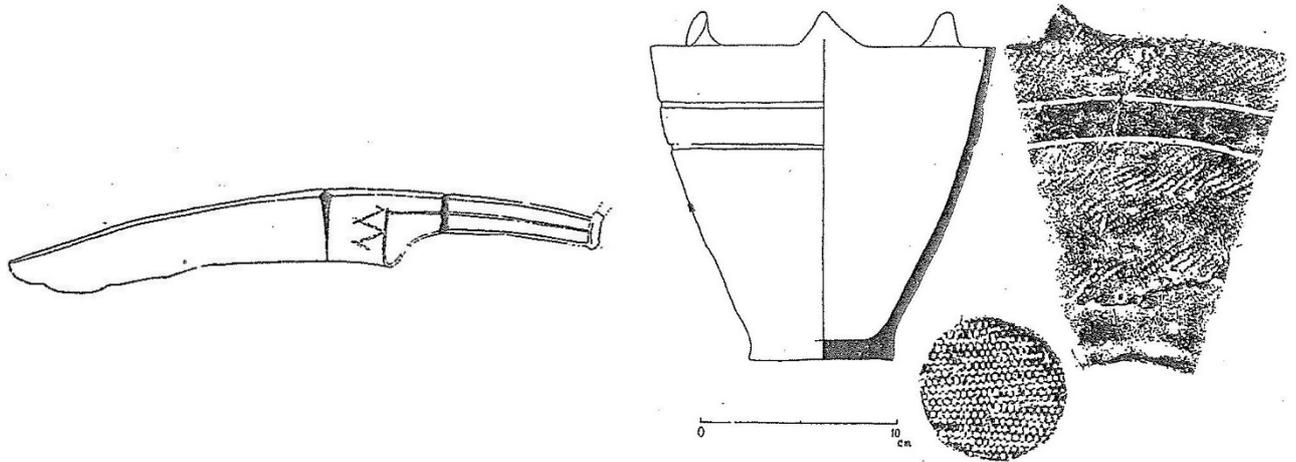


図99 三崎山A遺跡から発見された青銅刀と加曾利B1式土器

(12) 杉沢A遺跡

所在地は飽海郡遊佐町杉沢字中山口で、遺跡が発見されたのは1953年3月である。家屋に新築中に偶然に発見されたもので、知らせを受けた致道博物館の酒井忠純氏が現地で確認調査を行った。

土偶は地表から40cmのところに長径37cmの平らな石があり、その石を取り除いたところ、径20cmほどの石が「コ」の字状に置かれており、その間に、頭を北北西にして仰臥して置かれていた。酒井忠純はこの出土状態を図化し、江坂輝弥氏とともに考古学雑誌で報告した。それまで意図的に埋地された土偶はほとんど知られていなかったため、貴重な出土例とされた。

この土偶は、奈良国立博物館の所蔵となっている。

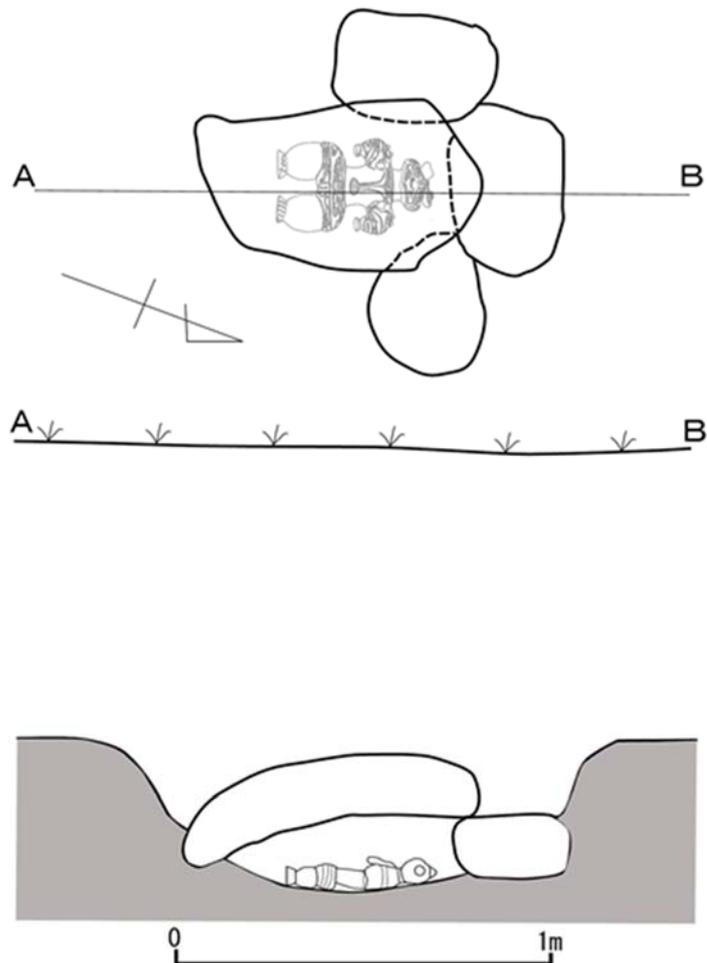


図100 杉沢A遺跡土偶出土状況図(酒井他1956から)